

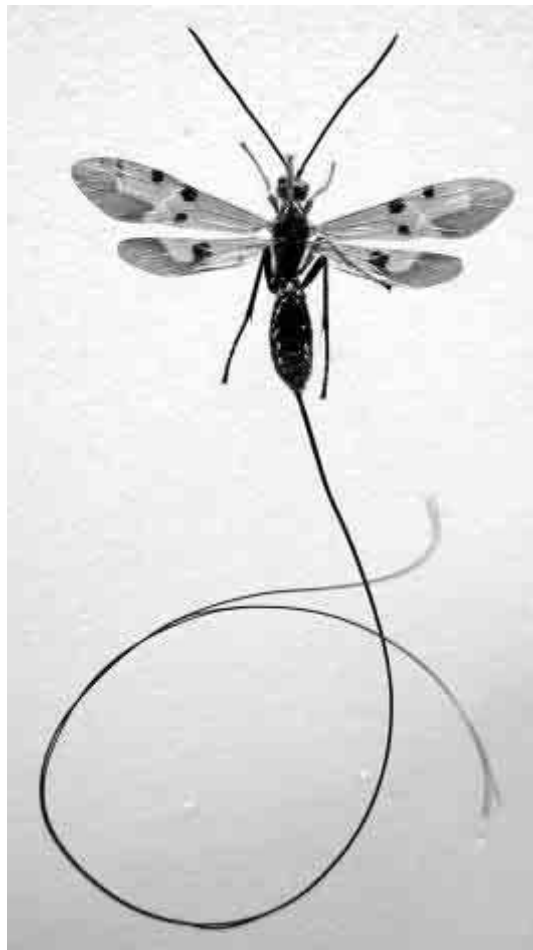
ウマノオバチ *Euurobracon yokohamae* (Dalla Torre)

【選定理由】

雑木林が減少し、宿主であるシロスジカミキリが少なくなったことによって生活の場を失い、本来少ない個体数が極端に少なくなった。

【形態】

体長 15～24mm。体は黄赤褐色で、腹部は暗褐色を帯びる。翅は赤黄色を帯び、外縁は広く暗褐色。前翅に 3 個、後翅に 1 個の黒紋がある。♀の産卵管は体の 7～9 倍にもなる。



豊田市東広瀬町, 2007 年 6 月 9 日, 間野隆裕 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

全県の丘陵の雑木林であった。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

台湾。

【生息地の環境 / 生態的特性】

二次林の雑木林に生息しているシロスジカミキリの幼虫に寄生生活をしている。

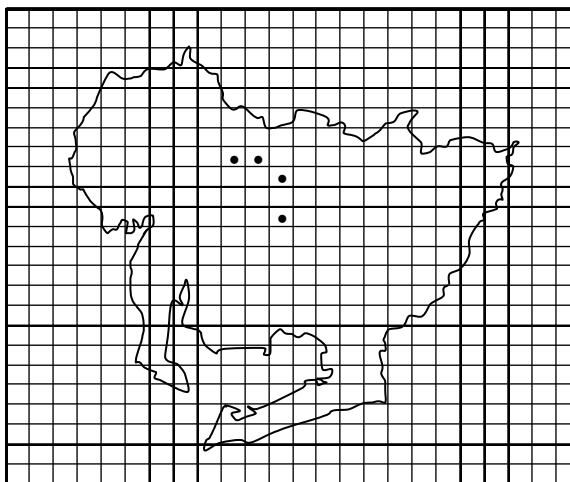
【現在の生息状況 / 減少の要因】

僅かに残された丘陵の雑木林に発生しているが、それらの林は開発されやすい地理的位置にある。

【保全上の留意点】

二次林の育成、都市郊外に残存する雑木林で現在も少数ながら発生しているので、それらの林が開発によって消えない対策が必要。

県内分布図



オオナガレトビケラ *Himalopsyche japonica* (Morton)

【選定理由】

幼虫が山地激流部を好むため、愛知県内での生息適地は極めて限定される。個体数は多くないと推定され、生息環境の保全が必要である。

【形態】

雄成虫の前翅長は 16～23.5mm、雌は 22～26mm。前翅は茶褐色の不規則な淡色斑紋がある。終齢幼虫の体長は 15～37mm、頭部の大部分と前胸は農褐色の斑紋で覆われ、中胸と腹部は濃緑色。中胸と後胸および腹部第 1～8 節の側面によく発達した気管鰓を持つ。また、中・後脚の基部に指状鰓を持つ。幼虫は巣を作らないが、蛹化期に荒い砂粒でドーム型の固着巣を作る。



岐阜県高山市岩井町, 1999 年 9 月, 西本浩之 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

設楽町呼間川と豊田市稲武町井山川でしか確認されていない。

【国内の分布】

本州および四国で生息が確認されている。

【世界の分布】

台湾および日本に分布する。

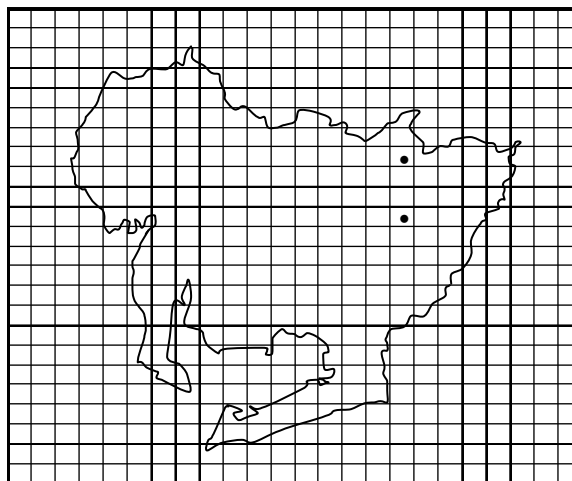
【生息地の環境 / 生態的特性】

山地の急勾配で大岩からなる激流に生息する。成虫は春から秋まで出現するが、基本的に年 1 化といわれている。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

生息環境が山地で流量が豊富な激流部であるため、産地は局限される。愛知県には本種の生息適地が少なく、さらに治水工事などにより河床の勾配が低下するなどして生息環境は悪化していると考えられる。

県内分布図



【保全上の留意点】

治水工事やダム建設時には、可能な限り生息環境を保全するように努める。

【特記事項】

Himalopsyche オオナガレトビケラ属で日本に生息しているのは本種のみである。年間を通して水温が低く、流量が安定かつ豊富な山地激流部に生息地が限定されるため、人為的な改変が施されていない環境水域であることを示す指標生物として利用される。

【関連文献】

Tsuruishi T., 2003. Life cycle of a giant carnivorous caddisfly, *Himalopsyche japonica* (Morton) (Trichoptera: Rhyacophilidae), in the mountain streams of Nagano, central Japan. Limnology 4: 11-18.

鶴石 達, 2004 オオナガレトビケラの分布と生活史. 昆虫と自然 39 (6): 23-25.

Tsuruishi T., 2006. Life cycle of *Himalopsyche japonica* (Morton) (Trichoptera: Rhyacophilidae) in two high mountain streams in Nagano, central Japan. Hydrobiologia 563: 493-499.

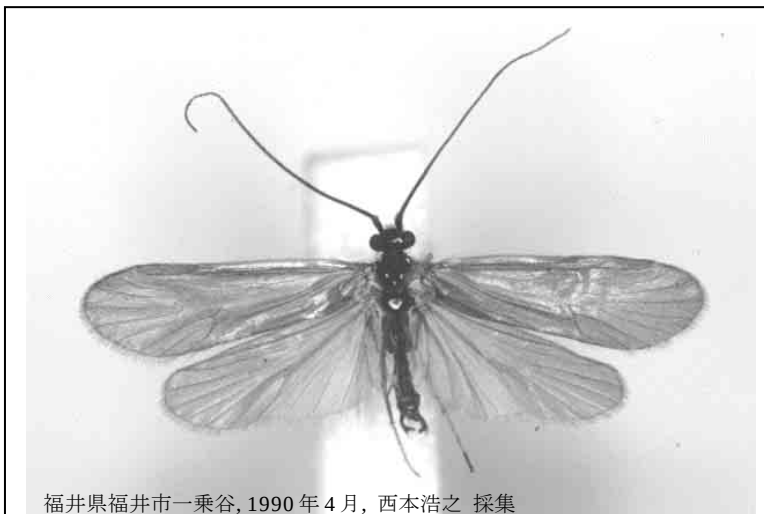
イワコエグリトビケラ *Manophylax futabae* Nishimoto

【選定理由】

非常に不安定な環境に生息するため、周辺の開発による影響を受けやすい。愛知県は分布のほぼ南限にあたり、現在確認されている県内の生息地は限られている。また、県内産と他地域の雄交尾器の形態は若干異なり、県内産個体群は貴重であると考えられる。

【形態】

成虫雄の前翅長は 6.8mm、雌は 5.8mm。体色は黒褐色、前翅はつやのある黒色で斑紋はない。終齢幼虫の体長は 6.7mm で頭部および胸部のキチン部は赤褐色、前胸・中胸は広く一対のキチン板に覆われ、後胸に 3 対の小キチン板を持つ。通常、腹部の気管鰓はないが、福井県鯖江市の個体群は第 3～4 腹節腹面に 1 対の単一気管鰓を持つ。細かい砂粒から成る巣を持ち、巣の背面に苔の小片を付けることがある。巣の長さは最長 9.6mm。



福井県福井市一乗谷, 1990 年 4 月, 西本浩之 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

岡崎市（旧額田町）閼菟溪谷および犬山市継鹿尾で生息が確認されている。

【国内の分布】

本州の東北から東海・北陸にかけて分布する。

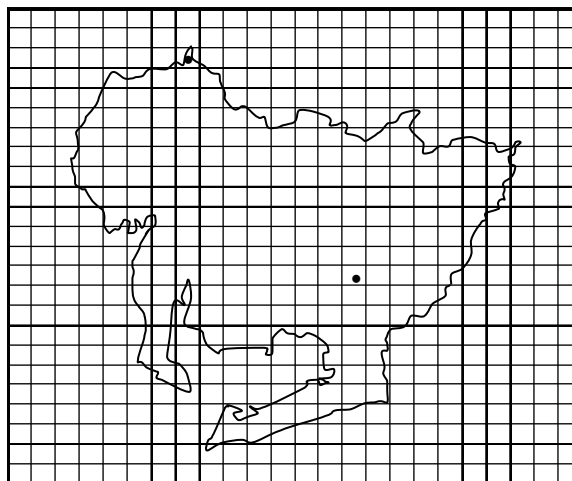
【世界の分布】

日本にのみ分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

川から離れた、大きな岩や岩盤の垂直になった面で、やや湿り気があり、多少の苔と地衣類が育つところを好む。乾期が続くと幼虫は巣の開口部に膜を張り、乾燥に耐える。成虫は 5 月に羽化する。卵から成虫までは 3 年以上必要と推測される。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

閼菟溪谷の林道脇の岩盤は比較的個体数が多く、林道に沿って広く生息する。犬山市の産地は個体数が少なく、生息範囲は小さい。その他の生息地は県内から見つかっていない。

【保全上の留意点】

河川沿いの林道の整備にあたっては、生息環境の保全に努める。今以上の分布の拡大は望めないため、現在の状況を最大限維持する必要がある。

【関連文献】

- Nishimoto, H., 1997. Discovery of the genus *Manophylax* (Trichoptera, Apataniidae) from Japan with descriptions of two new species. Japanese Journal of Systematic Entomology, 3 (1): 1-14.
- Nishimoto H., 2002. Description of a new species of *Manophylax* (Trichoptera: Apataniidae) from Japan, with a key and distributional notes for Japanese *Manophylax* adults and larvae. Proceedings of 10th International Symposium on Trichoptera, Mey, W. (ed.), Nova Suppl. Ent. Keltern, 15: 211-222.

コブニンギョウトビケラ *Larcasia akagiae* Nishimoto et Tanida

【選定理由】

全国的に採集例が少ない。愛知県内では豊川水系上流の寒狭川およびその支流にしか生息せず、希少であると考えられる。

【形態】

雄成虫の前翅長は 5.8～26.2mm、雌は 6.5～6.9mm。前翅は淡黒色で斑紋はない。終齢幼虫の体長は 6.2～6.9mm、頭部の大部分は濃茶色、頭頂前部は陥没し中央部には短毛に覆われた一対の瘤状隆起がある。前胸の前縁部は黄色で前縁近くに濃茶色の横側帯を持つ。中胸は二対のキチン板からなる。腹部 3～7 節の背面と腹面に単一気管鰓を持つ。巢の長さは 7.6～8.2mm で、やや粗雑な石粒からなる。末端腹面に一片のやや大きい石粒を付ける。



新城市寒狭川, 2000 年 3 月, 西本浩之 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

新城市（旧鳳来町）の寒狭川およびその支流でしか確認されていない。

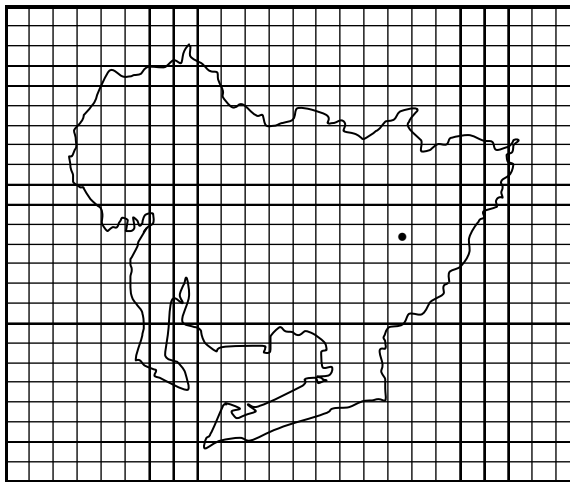
【国内の分布】

愛知、奈良、愛媛の各県で生息が確認されている。

【世界の分布】

日本にのみ分布する。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

山地の溪流や川幅 20～30m の河川にも生息する。年 1 化で成虫は早春（3 月～4 月上旬）の短期間に出現する。成虫は飛翔することが苦手で、代わりに翅をばたつかせて水面をスケートするように移動する。若齢幼虫は安定した大岩の底面の窪みに見られることが多い。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

産地は限られるが、生息地は比較的安定している。成虫が飛翔できず、今以上の生息地の拡大は見込めないため、現在の生息環境を保全することが重要である。

【保全上の留意点】

若齢幼虫の生活場所から判断して、シルトや細土の流入は本種の生息に大きなダメージを与えると考えられる。上流で大規模な工事が行われる場合は、十分な配慮が必要である。

【特記事項】

Larcasia コブニンギョウトビケラ属はスペイン、カシミール、インド（アッサム）、タイにそれぞれ 1 種ずつ、日本にコブニンギョウトビケラと栃木県日光に生息するコガタコブニンギョウトビケラの計 6 種しか知られておらず、非常に小さな属である。

【関連文献】

Nishimoto H., Tanida K., Gall W. K., Minakami N. T., 2003. Discovery of the genus *Larcasia* (Trichoptera, Goeridae) in Japan, with the descriptions of two new species. Entomological Science 2 (3): 425-438.

ヒゲナガトビケラ属の一種 *Leptocerus moselyi* (Martynov)

【選定理由】

全国的に採集例が少ない。愛知県内では豊田市矢作川でしか採集されておらず、希少であると考えられる。

【形態】

雄成虫の前翅長は 5.6～6.5mm、雌は 5.0～5.6mm。前翅は黒色で基部および中央より 2 カ所にやや目立つ白色斑を持つ。また、翅の先端から後縁にかけて小白色斑が散在する。
幼虫は未発見。



豊田市矢作川, 2007 年 6 月, 西本浩之 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市矢作川からしか確認されていない。

【国内の分布】

茨城、愛知、広島の各県で生息が確認されている。

【世界の分布】

ロシア (アムール) および日本に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

比較的川幅があり、流量の多い河川に生息すると考えられる。成虫は 6～8 月に採集される。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

個体数は少ないものの、矢作川では安定して採集される。

【保全上の留意点】

幼虫は確認されていないが、おそらく河川岸部の緩流あるいは止水域と推定される。岸部の改修は避け、自然環境を保全することが肝要である。

【特記事項】

愛知県以外の日本における本種の記録は茨城県で 4 個体、広島県で 1 個体のみである。一方、豊田市矢作川では 1 回のライトトラップで十数個体を採集することが可能で、国内唯一の安定した生息地と考えられる。

【関連文献】

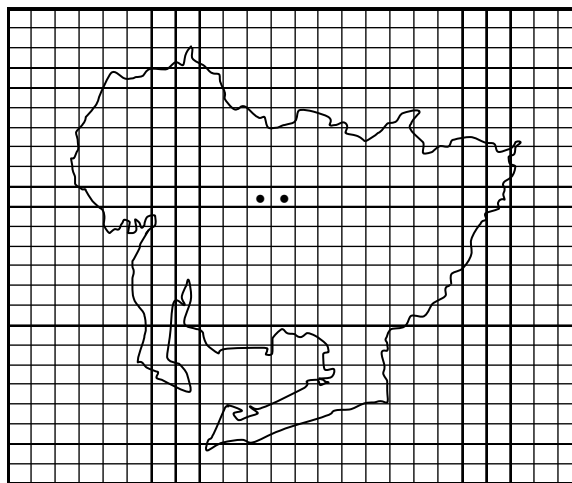
Katsuma, N., 2006. 茨城県内で確認されたトビケラ類の記録(第 2 報) -常陸大宮市(旧御前山村) 相川のトビケラ相-。りぼし, 33: 33-44.

西本浩之・森田久幸, 2001. 1995～1999 年の調査における豊田市都市ブロックの矢作川周辺の昆虫類 4、都市ブロック河辺のトビケラ相。矢作川研究, 5: 71-78.

野崎隆夫・中村慎吾, 2007. 広島県で採集されたトビケラ成虫の記録(第 2 報)。比和科学博物館研究報告, 48: 91-101.

Uenishi, M., 1993. Genera and species of leptocerid caddisflies in Japan. Proceedings of the 7th International Symposium on Trichoptera, Otto, C. (ed.), Backhuys Publishers, the Netherland. 79-84

県内分布図



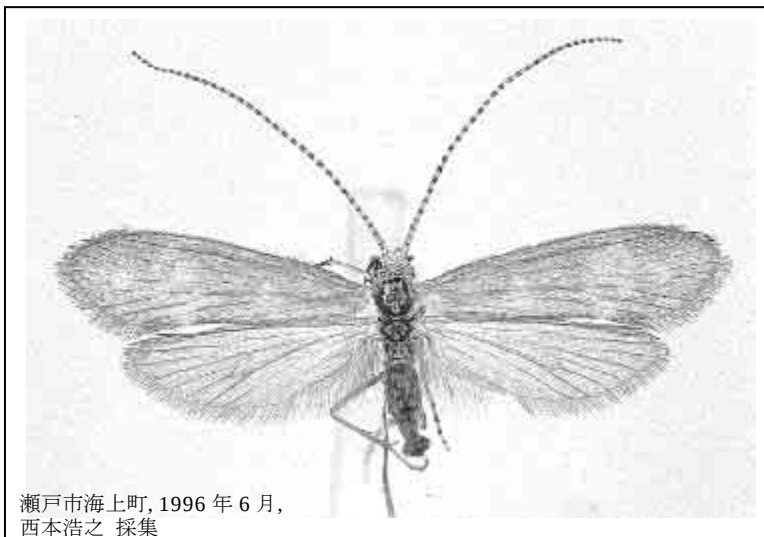
イトウホソバトビケラ *Molannodes itoae* Fuller et Wiggins

【選定理由】

全国的に採集例が少ない。愛知県内では瀬戸市海上の森と豊田市千鳥町でしか採集されておらず、希少であると考えられる。

【形態】

雄成虫の前翅長は 6.5～7mm、雌は 6mm。体色は茶色。前翅は淡黒色で不明瞭な淡色斑紋がある。頭部背面は白色毛で覆われる。終齢幼虫の体長は 8mm、頭部の色は後端の 1/6 を除いて濃茶、胸部のキチン板は茶色。後胸背面にキチン板はない。第 1～3 腹節背面に 2 又した 1 対の気管鰓（第 2 腹節の気管鰓は単一の個体もある）、第 2～3 腹節腹面に 2 又した 1 対の気管鰓、第 4～7 腹節腹面に 1 対の単一気管鰓を持つ。巣は砂粒で作られ、形状は扁平、しばしば巣の縁に植物片を付ける。巣の長さは最長 12mm。



瀬戸市海上町, 1996 年 6 月,
西本浩之 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

瀬戸市海上町と豊田市千鳥町で確認されている。

【国内の分布】

北海道、新潟、愛知、三重の各県で生息が確認されている。

【世界の分布】

ロシア（サハリン）、日本に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

山地および低地の細流に生息する。本州では成虫は 6 月に羽化する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

北海道では比較的広い範囲で採集されているものの、一度に採集される個体数は多くなく、愛知県からは瀬戸市海上の森でわずかしき採集されていない。本種の幼虫が細流という不安定な環境を好むことが一因として考えられる。

【保全上の留意点】

今以上の分布の拡大は望めないため、現在の生息地の環境保全に努める必要がある。

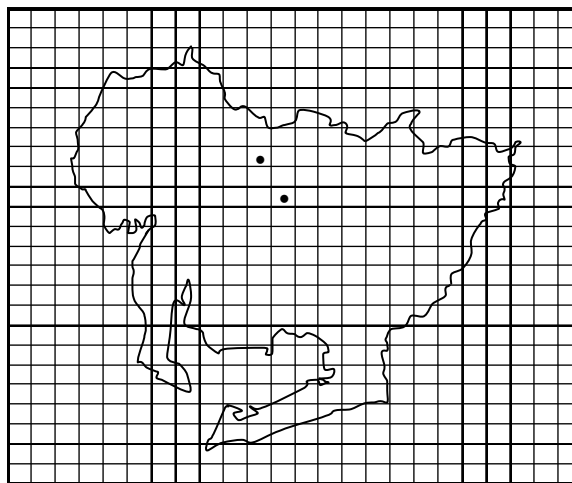
【特記事項】

Molannodes コガタホソバトビケラ属の現生種は、タイプ種である *M. tinctus* (Zett.) とイトウホソバトビケラの 2 種のみである。*M. tinctus* は北ユーラシアから北米にかけて広く分布するが、イトウホソバトビケラは日本とその近辺でしか知られておらず貴重な種と言える。

【関連文献】

Ito, T., 1998. The family Molannidae Wallengren in Japan (Trichoptera). Entomological Science, 1 (1): 87-97.
西本ふたば・西本浩之, 1998. 愛知県のトビケラ相(第 2 報) - 瀬戸市南東部、通称「海上の森」のトビケラについて - . 名古屋女子大学紀要(家政・自然編), 44: 147-154.

県内分布図



ギフチョウ *Luehdorfia japonica* Leech

【選定理由】

本種は適当に人手が加わった里山の環境を生息地としている。すなわち、春には林床に光が差し、夏には日陰を作るような落葉樹が生え、落葉樹林の林縁近くに幼虫の食草が自生し、成虫の吸蜜植物が多いような環境である。これらの自然は近年消滅し、本種も多くの産地を失った。とくに関東地方や太平洋沿岸地方の産地の減少が著しい。

【形態】

前翅長約 32～34mm の小型のアゲハチョウ。細長い尾状突起をもつ。翅表は黒と淡黄色の縞模様。後翅外縁に橙色紋、その内側の黒帯の中に藍色の小斑点、肛角に赤色の斑紋をもつ。♀はやや大型、翅形が丸く、前胸背に褐色の毛をもつことから区別できる。

近似種のヒメギフチョウ（愛知県には産しない）はやや小型、前翅の最外縁の黄色の線の最上端が内側にずれ非連続となる。また、後翅の外縁に沿う橙色紋が地色と同じ淡黄色である。

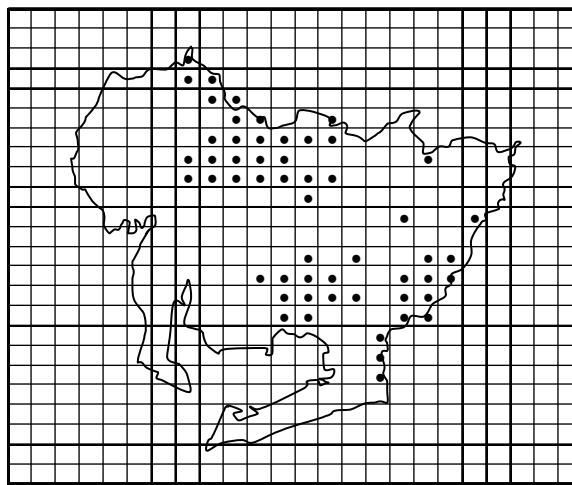
産地により微妙な翅形、大きさ、斑紋、尾状突起の長さなどに差がみられる。西部愛知県産は、岐阜県美濃地方産と同様やや小型で、黒帯の幅が広く、一見黒っぽい。愛知県東部産は、やや大型で黒帯が細く、明るい。

【分布の概要】

名古屋市、犬山市、小牧市、春日井市、日進市、瀬戸市、愛知郡長久手町など尾張東部丘陵から、豊田市にかけて産地が比較的多い。この群の東限は豊田市足助付近、南限は同市古瀬間町となる。一方、東部群は岡崎市から蒲郡市、豊橋市、新城市にかけてやや局地的に産する。旧北設楽郡には設楽町（田内、清崎）、東栄町（本郷、奈根）にごく少数の採集記録がある。津具村と設楽町境の碁盤石山で 2 匹の採集記録があり、例外的な産地かと思われる。両群の間には矢作川が流れており、分布空白地帯となる（高橋，1995）。

本州の特産種で、離島や小さい半島、沖積平野からは知られない。丘陵地帯から低山にかけて産地が多く、飛騨では山間の湿原が生息地となることもある。北限は秋田県の鳥海山麓、西限は山口県。日本海側では、ほぼ連続して分布し、個体数も少なくない。太平洋側では、東京都を東限とし、神奈川、静岡を経て愛知と分布するが、いくつかの産地群に分断されており、連続して産せず、また近年激減～消滅した産地が多い。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

主な生息地は、丘陵から低山にかけての人里で、春には林床に光が差し、幼虫の食草のカンアオイ類や成虫の吸蜜植物であるカタクリやスマレが咲く明るい林の周辺である。針葉樹の植林でも、まだ背丈の伸びず林床が明るい時には、幼虫の食草がよく生育し、ギフチョウの発生地となることがあるが、針葉樹が育ち、林床が暗くなったり、下草の背丈が伸びたり、ササやシダ類が繁茂するとカンアオイは消滅し、ギフチョウも産しなくなる。このように生息地の影響がギフチョウの発生に大きく作用するため、産地の変遷が激しい。

成虫は年 1 回、多くの産地ではソメイヨシノの開花と一致して羽化し、スマレ、カタクリ、サクラなどを訪花する習性が強い。カンアオイ類（愛知県ではヒメカンアオイが優位、愛知県西部では一部スズカカンアオイ）も丁度その頃新芽を出し、この葉裏に産卵する。幼虫はその葉が硬くならないうちに食べ、ほぼ 1 か月で蛹化、そのまま冬を越す。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

名古屋市内からはほぼ絶滅した（高橋，1975）。豊橋市東部、蒲郡市北部からも絶滅した可能性が高い。一般に都市部周辺では多くの産地が消滅した。上記したように生息環境の変化を大きく受け、ギフチョウの発生量の多寡が左右され、ときに多くの個体を見る年があったり、急に減少したり、年による発生量の変化も小さくない。産地の消滅は、整地、ゴルフ場、工場、住宅地の建設によることが多い。また、人工の手が加わらず、放置された林も産地を消滅させた。

【保全上の留意点】

幼虫の食草、成虫の訪花植物、活動空間など、生息環境を保つことが最も大切である。人工の手が入り過ぎることも、自然を放置することも、本種の生存には適さない。

【特記事項】

本種を放蝶して増やそうとする試みがある。これには、その固有遺伝子を攪乱したり、飼育による摂食能力の劣る個体を自然界に返したりして、本来の自然をむしろ損なうことにもなりうる。綿密な計画を立て、慎重に行う必要がある。

【引用文献】

- 高橋 昭, 1975. 名古屋市のギフチョウは絶滅してしまったか? . 昆虫と自然, 10 (4): 29-31.
高橋 昭, 1995. 愛知県のギフチョウ. —90 年間の記録から—. 昆虫と自然, 30 (4): 4-6.

オナガシジミ *Araragi enthea enthes* (Janson)

【選定理由】

本県では、1968年に豊田市（旧稲武町）で本種が、初めて確認されている（成瀬ほか、1968）。近年、豊根村（旧豊根村）でも発見され（浅野ほか、2001）、旧稲武町の井山川及び野入川流域（矢作川水系）、豊根村の坂宇場川流域（天竜川水系）の二つの限られた地域で発生している。食樹のオニグルミに依存して発生するため、道路拡張や堤防改修、また昨今の多量降雨などの影響を受けて河川環境が変化したこともあり、食樹の減少に伴い個体数は減少気味である。

【形態】

前翅長は18mm程度。色彩斑紋は♂♀ほとんど同じ。♂では触角の裏面が先端だけ黄色なのに対し、♀では全体的に黄色になる。裏面の斑紋が特異で他種との区別は容易である。

【分布の概要】

【県内の分布】

1968年に豊田市（旧稲武町）で初めて卵が確認された。成虫は、井山川や野入川（鈴木ほか、1987）で確認されているが、近年、旧豊根村天竜川水系の坂宇場川（竹内ほか、2000；浅野ほか、2001）でも発見された。

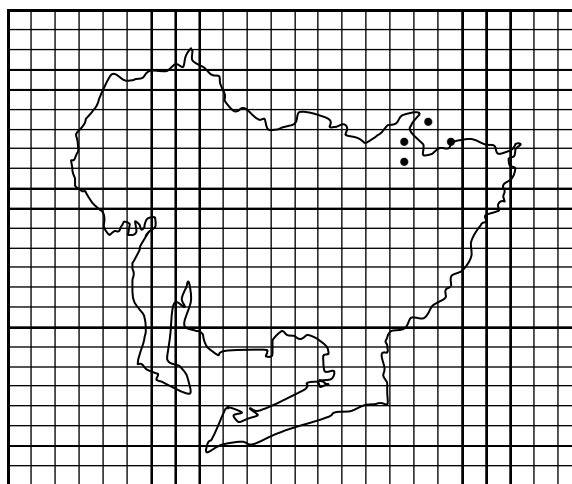
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。本州中部地方以北の地域では、山地のクルミ林に稀ではない。近畿地方から九州にかけては、産地は局所的になる。

【世界の分布】

ロシア南東部、朝鮮半島、中国東北部および西部、台湾に分布する。1属1種といわれていたが、最近、同属の近似種が発見されている（小岩谷、2007）。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

本種は、山間地の溪流沿いに生育するオニグルミを食樹として発生している。年1回の発生。♂は7月中旬ごろから発生し、♀は、10月上旬まで見られることもある。日周活動は、午後4時頃から開始され、♂には占有性が認められる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

旧稲武町の井山川と野入川や豊根村の坂宇場川流域の限られた地域で発生している。比較的安定した発生を続けていたと考えられるが、道路拡張、堤防保全・改修や昨今の多量降雨の影響を受け、河川環境が変化したためオニグルミの減少と伴に本種の個体数も減少している。

なお、山間地の発生地としては、本県の近隣では三重県の鈴鹿山脈北部の藤原岳や御池岳（浅野ほか、1985；吉友、2001；大曾根、2003）、岐阜県の旧串原村（西田、2003）などにも産地がある。

【保全上の留意点】

本種は、食樹のオニグルミに依存して発生しているため、まずオニグルミの生育地の保全が必要不可欠である。

【引用文献】

- 浅野 隆ほか、1985. 三重県でオナガシジミを確認. 佳香蝶, (141): 15.
浅野 隆ほか、2001. 愛知県豊根村でオナガシジミを確認. 佳香蝶, 53 (207): 38.
小岩屋 敏、2007. 32. オナガシジミ. 世界のゼフィルス大図鑑解説編: 92. むし社, 東京.
成瀬善一郎ほか、1968. 奥三河の冬期採集報告. 佳香蝶, 20 (75): 79.
西田真也、2003. 岐阜県のチョウ-2003-: 20. 自刊.
大曾根 剛、2003. 鈴鹿御池岳のオナガシジミの記録. 佳香蝶, 55 (216): 70.
鈴木哲彦ほか、1987. 愛知県のミドリシジミ類一分布と生息環境 (1)ー. 佳香蝶, 39 (152): 57.
竹内 剛ほか、2000. 採集の思い出話. SPINDA (15): 77-85.
吉友郁哉、2001. 三重県藤原岳のオナガシジミ. 蝶研フィールド, (176): 25.

【関連文献】

- 巢瀬 司ほか、2003. 22. 愛知県. 日本産蝶類の衰亡と保護第5集. 日本産蝶類県別レッドデータ・リスト(2002年): 82-87. 日本鱗翅学会, 東京.

エゾミドリシジミ *Favonius jezoensis* (Matsumura)

【選定理由】

本県では、1955年に豊田市（旧稲武町黒田ダム）で1頭が採集されたのが初めての記録（鈴木ほか, 1988）である。その後、豊根村でわずかな採卵記録があるのみである。近隣の長野県浪合村治部坂峠では、本種が多産するという。

【形態】

前翅長 21mm 程度。♂は表面の大部分が緑色であり後翅表外縁の黒帯は幅広く一定の太さを有する。尾状突起は、近似種のなかではもっとも短い。♀は、表面に全く緑色鱗はない。近似種のヒロオビミドリシジミ、ジョウザンミドリシジミ（共に愛知県未記録）ならびにハヤシミドリシジミ、オオミドリシジミによく似ており識別は難しい。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市（旧稲武町、1955年成虫採集）と豊根村（旧豊根村、1988年、1995年越冬卵採集）の3例のみの記録がある。1995年の越冬卵採集記録以降は、現在にいたるまで公式記録はない。

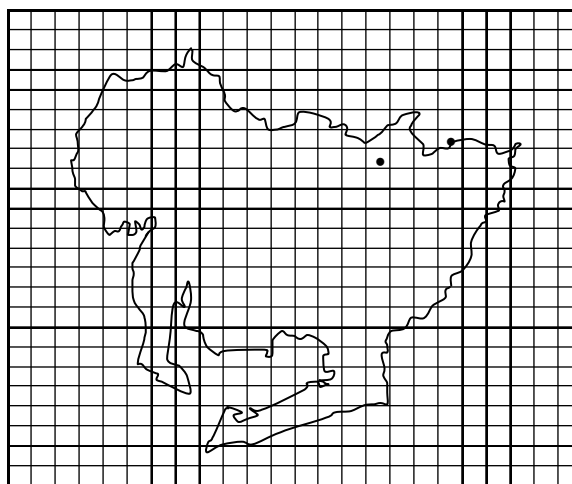
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。北海道および本州北・中部の山地にはやや広く分布するが、本州西南部の暖地では山地のみに発見される。

【世界の分布】

サハリン、クナシリにも分布する。日本列島ならびにサハリン、クナシリを含めた地域の特産種である（小岩屋, 2007）。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

本県の成虫の採集例が極めて少ないので、不明確ではあるが、一般的には年1回の発生、7～8月に出現し、ミズナラを主にした斜面や溪谷部の落葉広葉樹林に生息する。生き残りの♀が、9月に見られることも稀ではない。♂の活動時間は、日中から夕方まで及び15～17時の時間帯が最盛となる。クリの花などで吸蜜し、♂は吸水もする。卵で越冬する。卵はミズナラやコナラなどの樹幹・太枝上の亀裂部や褶曲部・枝の分岐部などに産卵されるので見つけるのはかなり困難である。幼虫は、コナラやミズナラの葉を食べて成長する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

1995年に豊根村で越冬卵が再確認されているが、その後現在に至るまで採集記録はない。データ数が少ないので生息状況も個体数の多寡も不明ではあるが、近隣の岐阜県瑞浪市（大曾根, 2005）、岐阜県旧上矢作町（西田, 2003）にも生息していること、また、長野県浪合村治部坂峠には多産するということを考え合わせると、本種は少ないながらも安定した状況で生息していると考えられる。食樹としてミズナラを好むといわれ、太陽光が差し込むミズナラ林の確保が必要となるので管理された落葉樹林の確保が必要不可欠である。計画的なモニタリングの実施が望まれる。

【保全上の留意点】

環境指標となる美麗種チョウ類を次代に残すことを考慮したミズナラ自然林の保全についての基本計画の検討が望まれる。

【引用文献】

- 小岩屋 敏, 2007. エゾミドリシジミ. 世界のゼフィルス大図鑑解説編: 274-275. むし社, 東京.
西田真也, 2003. 岐阜県のチョウ-2003-: 20. 自刊.
大曾根 剛, 2005. 岐阜県恵那山系のエゾミドリシジミの記録. 佳香蝶, 57 (223): 54.
鈴木哲彦ほか, 1988. 愛知県のミドリシジミ類一分布と生息環境一. 佳香蝶, 40 (153): 5-14.

【関連文献】

- 巢瀬 司ほか, 2003. 22. 愛知県. 日本産蝶類の衰亡と保護第5集. 日本産蝶類県別レッドデータ・リスト(2002年): 82-87. 日本鱗翅学会, 東京.

ウラギンスジヒョウモン *Argyronome laodice japonica* (Ménétrières)

【選定理由】

本種は、草原性のチョウで、かつては名古屋市などの低地も含め全県にわたり比較的多く観察されている。近年はこのような低地のみならず、山地の草原でも個体数はかなり減っている。全国的にも減少しているという。

【形態】

前翅長 29mm 程度、ヒョウモンチョウ類の中ではやや小型である。♀は大型、翅形は丸みを帯び前翅表面の先端に白点がある。後翅裏面の外半分が褐色をしている。この特徴はオオウラギンスジヒョウモン、メスグロヒョウモンのみに共通するが、前翅の翅端・外縁のくびれ度合い・後翅の点状の黒紋の有無などから容易に区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市などの低地から、県内各地の丘陵地・山地まで広範囲にわたり分布する。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州南部まで分布する。種子島・屋久島およびそれ以南の南西諸島からは知られていない。

【世界の分布】

サハリン、朝鮮半島、中国東北部、ユーラシア大陸の北部まで分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

本種がもっとも多く見られるのは、標高 500～1,000m くらいの疎林の周辺の草原で、開けた草原よりも低木を交えた草原や、疎林を好む習性がある。愛知県や岐阜県の低地では、ヒメヒカゲの生息する湿原に、ヒメヒカゲとほぼ同じ時期に湿原の上を飛翔しているのがよく見られた。

低地の産地では、年 1 回 6 月を中心として現われ、盛夏には姿を消し、秋に再び活動を開始し、アザミ類、ヒヨドリバナ、ソバの花などで吸蜜する。卵ないしは孵化したままの 1 齢幼虫で越冬する。飼育下では、各種のスミレ類を食し羽化する（高橋，1984；田中，2004）。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

近年、名古屋市内、豊橋市内や濃尾平野、知多半島などでの記録は著しく減少している。以前比較的多く産した尾張や三河の低山から奥三河の山地でも、個体数の減少が著しく、まれにしか確認できない。減少の理由は明かでない。かつて多産した時代にあっても、本種の幼虫を野外で発見する機会は著しく少なく、したがってその生態や食草との関係はほとんどわかっていない。

【保全上の留意点】

本種の減少が単にスミレ類全体の減少によるとは考えられない。現時点で本種の生態に不明な点が多く、具体的な保全対策の提案が困難である。しかし、本種を含め草原性のチョウが全般に減少している現実から、草原の保全は最低限の条件であろう。

【特記事項】

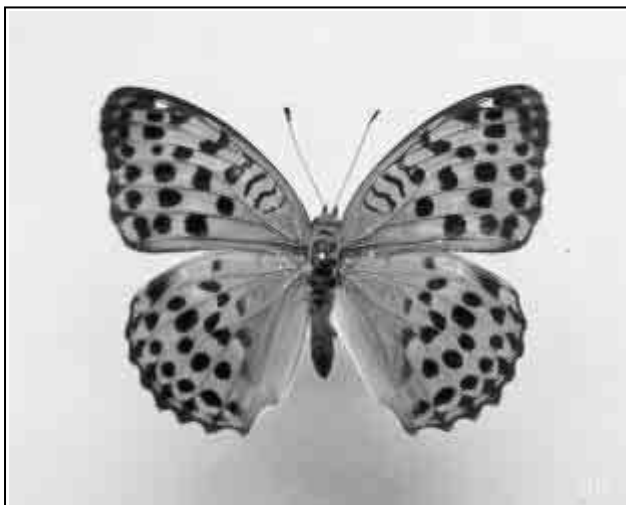
本種は、2007 年 8 月公表の環境省レッドリスト（昆虫類）に準絶滅危惧種として新たに選定された。

【引用文献】

高橋 昭, 1984. チョウ類. 愛知の動物: 133. 愛知県郷土資料刊行会.
田中 蕃, 2004. レッドデータブックなごや 2004 動物編: 164. 名古屋市環境影響評価室, 名古屋.

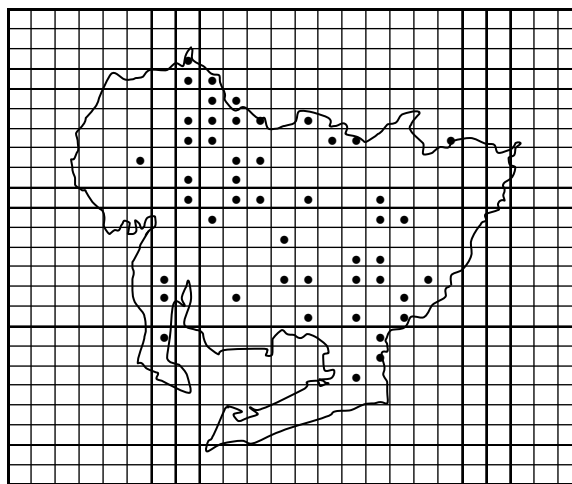
【関連文献】

白水 隆, 2006. ウラギンスジヒョウモン. 日本産蝶類標準図鑑: 213-214. 学習研究社, 東京.
高橋匡司ほか, 2001. 旭町のチョウ類. 旭町の昆虫: 253. (財)旭高原自然活用村協会.



豊田市(旧旭町), 1999 年 6 月 20 日, 高橋匡司 採集

県内分布図



オオムラサキ *Sasakia charonda charonda* (Hewitson)

【選定理由】

日本最大のタテハチョウであり、低山地から高地にかけて生息地は点々と存在しているが、近年、混交林の繁茂などにより生息環境が悪化し、その個体数が減少している。

【形態】

♂の前翅長は55mm程度で、翅の地色は♂♀とも暗褐色、♂は前後翅の基半分が紫色に輝くが、♀はこれがなく、やや大型で翅形が丸い。越冬幼虫は、ゴマダラチョウとともに落葉の裏面に発見されるが、ゴマダラチョウより小さく、より細長く、背面の突起が4対あることにより容易に判別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張地区の名古屋市(加藤, 1942)、春日井市(高橋匡司, 未発表)、瀬戸市、三河地区の豊田市、岡崎市(旧岡崎市、旧額田町)(大曾根, 2006)、新城市(旧作手村、旧鳳来町)など低山地の雑木林から高地まで広範囲にわたって記録がある。

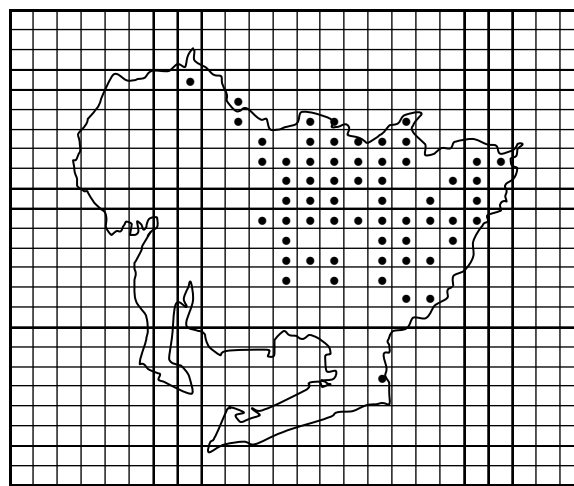
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布、北海道では産地は局限されている。東京付近は、開発のために産地は大幅に減っている。日本西南部の暖地では、主に山地帯のみに産し、多くはない。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部、中国、ベトナム、台湾に産し、東アジアの固有種である。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

丘陵地や河岸段丘の雑木林に生息している。年1回の発生で、6月中～下旬から発生する。樹上を高く飛び、好んでコナラなどの樹液に集まる。幼虫の食樹はエノキである。幼虫は、根際に降りて落ち葉の中で翌春の新芽時まで越冬する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

雑木林に生息している。市街化の促進、工業用地開発などによる生息地の消滅や、雑木林の管理放棄などによる混交林の繁茂が進み、生息環境が悪化し、個体数が減少している。エノキが生育している河畔林も、山間地の荒廃に起因した増水のため、根際の越冬幼虫が流されたり埋もれてしまい個体数が減少してしまう。

【保全上の留意点】

里山や河畔の混交林の定期的かつ継続した間伐などによる生息地の保全管理。住民や地域の小中学生による、公有地や社寺にあるエノキの根際に越冬する幼虫の保全のための落葉の飛散防止活動や放蝶による遺伝子攪乱防止の啓蒙教育の実施など。

【特記事項】

本種は形も大きく、♂の翅表面は、紫色の光沢があり美しいこともあり「国蝶」に指定されている。

【引用文献】

- 加藤一三, 1942. 学林, (117): 61-66.
大曾根 剛, 2006. 愛知県男川流域におけるオオムラサキとゴマダラチョウの分布調査. 佳香蝶, 58 (226): 38-40.

【関連文献】

- 白水 隆, 2006. オオムラサキ. 日本産蝶類標準図鑑: 241. 学習研究社, 東京.
高橋匡司ほか, 2001. 旭町のチョウ類. 旭町の昆虫: 271. (財)旭高原自然活用村協会.
高橋匡司ほか, 2005. チョウ目チョウ類. 豊田市自然環境基礎調査報告書(資料編): 285. 豊田市.
寺部謙一, 1977. 愛知県豊田市産オオムラサキのスギタニ型の記録. 佳香蝶, 29 (109): 11.

オオヒカゲ *Ninguta schrenckii* (Ménétrières)

【選定理由】

かつては本県の低山帯にかけて個体数も少なく、産地を訪れば確認できる種であったが、近年は生息地の環境変化が著しく、産地そのものが消滅した所も多く、本種も減少している。

【形態】

前翅長 40mm 程度。日本産最大のジャノメチョウで、同定を誤る近似の種はない。色彩斑紋は♂♀大差ないが、♀は翅形がやや広く翅の地色は淡色、後翅表の黒円斑列が大きく目立つ。後翅内縁基部には、♂では銀灰色に目立つ性標があり♀はこれがない。

【分布の概要】

【県内の分布】

本県では瀬戸市、豊田市（旧豊田市、旧足助町、旧小原村、旧旭町、旧下山村、旧稲武町）、新城市（旧新城市、旧作手村）、設楽町、豊根村などから記録されている（巢瀬ほか、2003）。

【国内の分布】

北海道と本州に分布する。四国・九州にかけては知られていない。東北地方は全県に、長野県や新潟県では産地が多く、個体数も多いが、この両県を除くと産地は局地的となる。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部、中国西部、ロシア南東部、チベットに分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

林内の湿地などに生育するやや大型のスゲ科の植物を幼虫が食べるので、このような環境に発生する。成虫は林の中だけでなく、その周辺の道にもよく出現する。

成虫は直射日光の乏しい林の中の葉上や樹木の幹にとまっていることが多い。飛び方はゆるやかで、発生地をあまり離れない。

年1回発生、愛知県の低地では6月中旬から成虫が見られるようになる。終齢幼虫は70 mm にも達し、特徴のある食痕から発見は容易である。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

瀬戸市や旧豊田市での生息は著しく減少したが、その一方では新産地も見つかっている。かつて容易であった卵、幼虫などの観察も最近ではほとんど不可能になった。大型のチョウであり、見逃すこともあまりない種でありながら、採集目撃の記録例は少なくなっている。減少の理由は明らかでない。水辺に自生する大型のスゲ科植物が以前と同様に見られても、本種がいなくなった所も多い。

【保全上の留意点】

かつての生息地であった林中や湿原、水流の保全が先ず必要である。

【特記事項】

夕方は活発に飛翔する。

【引用文献】

巢瀬 司ほか, 2003. 22. 愛知県. 日本産蝶類の衰亡と保護第5集. 日本産蝶類県別レッドデータ・リスト(2002年): 82-87. 日本鱗翅学会, 東京.

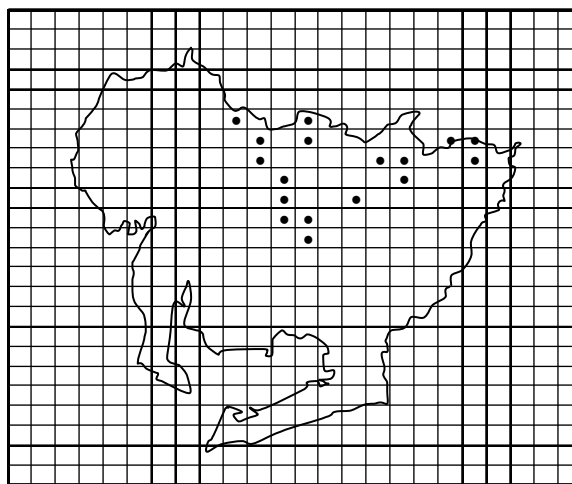
【関連文献】

白水 隆, 2006. オオヒカゲ. 日本産蝶類標準図鑑: 213-214. 学習研究社, 東京.
高橋匡司ほか, 2005. チョウ目チョウ類. 豊田市自然環境基礎調査報告書(資料編): 287. 豊田市.



豊田市上高町, 2003年6月29日, 高橋匡司 撮影

県内分布図



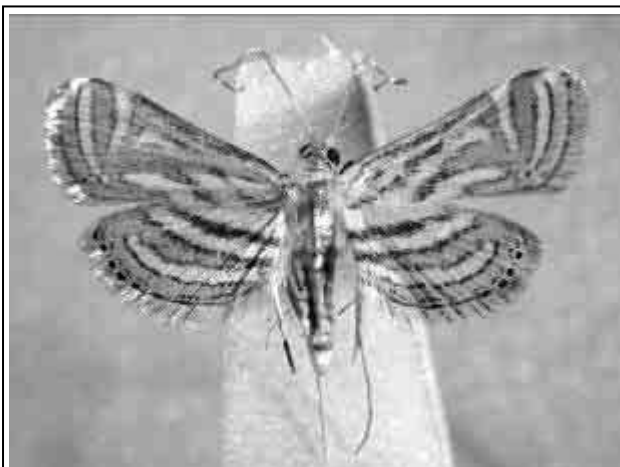
ヒメコミズメイガ *Parapoinx rectilinealis* Yoshiyasu

【選定理由】

記録が少なく生息環境が激減している。水質の悪化等と共に残された生息環境も狭められている可能性がある。

【形態】

開張約 12mm、前後翅とも黄金色の地。前翅に黒い縁取りを持った白色横線が外縁部と外横部に 1 条、前後翅の中央部に縦線がそれぞれ 3 条見られ、後翅には外縁部に数個の小黒点を有す。



三重県上野市法花, 1993 年 9 月 11 日, 間野隆裕 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

豊橋市（中村ほか, 1996）。

【国内の分布】

全国的にもまれで、新種記載された京都（Yoshiyasu, 1985）と、その後宮崎県延岡市（朝日, 1990）、三重県（間野, 1996）、岩手県（岩手県, 2001）、滋賀県（滋賀県, 2006）で採集されているだけである。

【世界の分布】

現状では日本特産種。

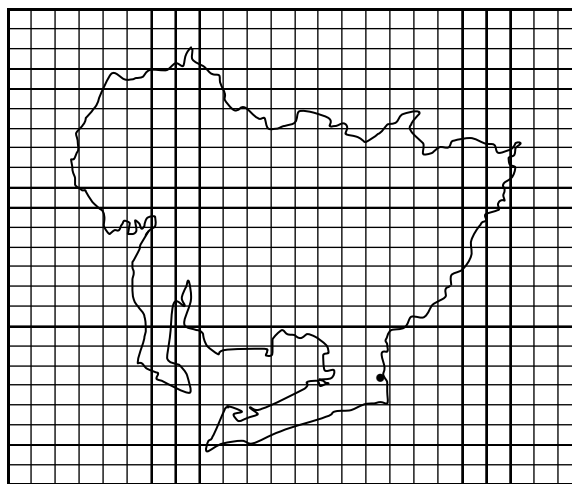
【生息地の環境 / 生態的特性】

食草等幼生期については知られていないが、本属の幼虫は気管鰓を持つ水生昆虫で、水生植物を食べると考えられる。しかも既知産地の状況から明らかに貧栄養湿地に生育する植物に依存していると考えられる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内においては 1 カ所の記録のみで、生息できる湿地環境が激減している。

県内分布図



【保全上の留意点】

生息環境の保全が急務と考えられる。

【特記事項】

おそらく幼虫が水生のため、水質も生息に重要な要因になると考えられる。

【引用文献】

- 朝日延太郎, 1990. 宮崎県北部から得られた注目すべき蛾類(VI). 誘蛾燈, (120): 63-64.
岩手県, 2001. いわてレッドデータブック 岩手県の希少な野生生物. 613 pp. 岩手県.
滋賀県, 2006. 滋賀県で大切にすべき野生生物. 滋賀県レッドデータブック 2005 年版. 563 pp.
間野隆裕, 1996. 三重県上野市法花の湿地のガ. 蛾類通信, (187): 184-188.
中村正直・工藤広悦・内藤幸之助, 1996. 葦毛湿原(豊橋市岩崎町)で獲られた蛾類目録(葦毛第 2 湿原(指定外地)の蛾類調査報告 4). 蛾類通信, (189): 223-230.
Yoshiyasu, Y., 1985. A systematic study of the Nymphulinae and the Musotiminae of Japan (Lepidoptera: Pyralidae). Scient. Rep. Kyoto prefect. Univ.(Agric.) 37: 1-162.

フジキオビ *Schistomitra funeralis* Butler

【選定理由】

日本特産種で、全国的に分布が局所的であるが、県内には一ヶ所しか記録がない(吉富・野中, 1995)。

【形態】

開張 46mm～53mm。♂の触角は櫛歯状、♀の触角は糸状。翅の地色は黒色で、前後翅に黄色又は黄白色の顕著な斑紋を持つ。腹部背面は黒色で黄色帯を有する。



三重県大杉谷狸峠, 2001年6月3日, 間野隆裕 撮影

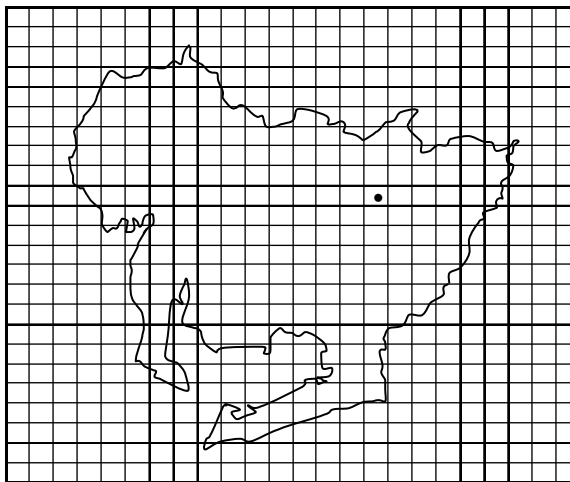
【分布の概要】

本州の関東地方以西、四国、九州に分布。垂直分布は広く、標高約 2,000m の亜高山から標高 300m 前後の山麓または丘陵まで分布する。ブナを主とする落葉広葉樹林帯と隣接する草原(湿原)で見られるが、和歌山県のように照葉樹林帯にも分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

成虫は昼行性の蛾で、年に1回、5～6月頃に出現する。幼虫の食樹はナツツバキ(ツバキ科)が知られている。幼虫は白蠟物質で被われ、7～8月頃老熟し、蛹態で越冬するという(杉, 1987)。本種の生息地は食樹ナツツバキ(シャラ)の自生地と重なるものと思われるが、県内にはナツツバキの自生地そのものが少ない。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内には設楽町裏谷における記録が唯一である。隣県の静岡県、三重県、岐阜県では記録があるが、数少ない。

【保全上の留意点】

食樹ナツツバキと、周辺の生息環境を保全する必要がある。

【引用文献】

吉富博・野中 勝, 1995. フジキオビを愛知県で採集. 月刊むし, (298): 25.
杉 繁郎(編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑: 114. 講談社, 東京.

【関連文献】

後藤 伸, 2000. 虫たちの熊野: 130-131. 紀伊民社, 田辺.
松村松年, 1937. 原色千種続昆虫図譜: 78, pl. 39. 三省堂, 東京.

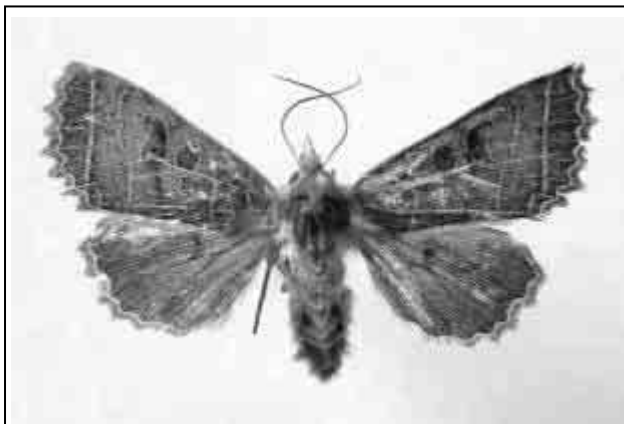
サヌキキリガ *Elwesia sugii* Yoshimoto

【選定理由】

照葉樹林帯の蛾とされるが、生息密度が低く生息地が局限されている。

【形態】

開張 31～34mm、前翅は比較的細長く外縁は波状。濃いチョコレート色を呈している。環状紋の下方に接してほぼ円形の楔状紋を表す。外縁部・外横部・内横部に横線が発達する。



豊田市猿投山, 1990年11月17日, 間野隆裕 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市猿投町(水野・間野, 1990)のほか、豊田市六所山でも生息が確認されている(田中ほか, 2005)。

【国内の分布】

愛知県以外では大阪府箕面公園、香川県象頭山、そのほか千葉県、高知県、長崎県、熊本県でも最近記録されている。

【世界の分布】

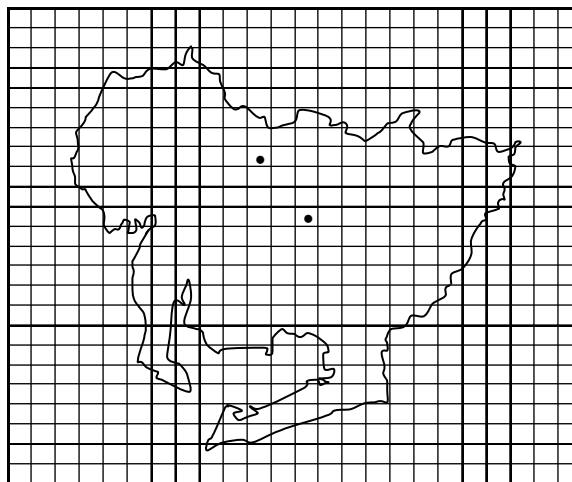
日本特産種

【生息地の環境 / 生態的特性】

本種は暖温帯に生息が限定され、生息地は照葉樹林帯(常緑広葉樹林帯)と考えら、県内の生息地も、照葉樹の二次林となっている。現段階では幼虫の食性が不明なので、その解明が待たれる。

成虫の発生時期は11月から12月に及び、日没直後から早い時間帯にライトに飛来する。しかしそれ以降は飛来しない。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

既産地でもこれまで一度に数多く得られることはなかったが、近年特に得られにくくなっており、生息密度が極めて低い状況と推察される。

【保全上の留意点】

良好な常緑広葉樹林に生息することと、県内では分布が限定されていることから、そこでの森林保全が必要不可欠な条件と考えられる。

【引用文献】

水野利彦・間野隆裕, 1990. 愛知県におけるサヌキキリガの記録. 誘蛾燈, (122): 160.
田中 蕃・間野隆裕・蟹江 昇・高橋匡司・岩月 学・小林広成・有田玲子・山田真澄, 2005. 豊田市自然環境基礎調査報告書: 本編VII 昆虫類: 181-323. 資料編V 昆虫類: 105-385. 豊田市.

【関連文献】

水野利彦, 1992. 日本の珍しい蛾 -9- サヌキキリガ. やどりが, (149): 35.
Haruta T., 1994. Moths of Nepal, Part3. Tinea, 14 (Supplement 1): 1-171.

イセキリガ *Agrochola sakabei* Sugi

【選定理由】

特異環境に生息し、県内の生息地は1ヶ所のみで、生息密度も低く、存続に不安がある。

【形態】

開張約 30～34mm。翅の地色は灰褐色で、前翅に腎状紋や暗色点を有する。♂は♀よりもやや小さく、前翅は♀に比べて幅が狭く細い。

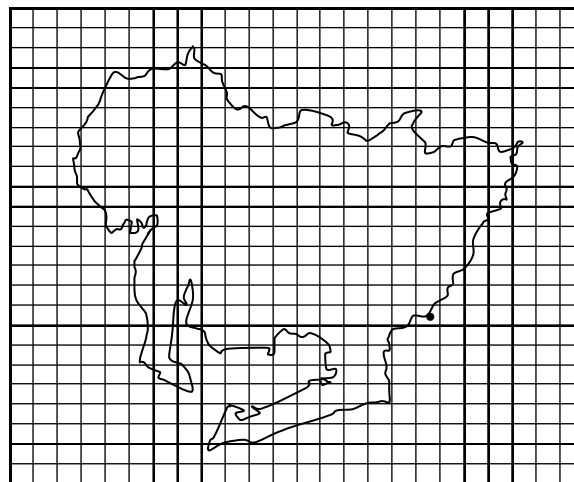


岐阜県山県市伊往戸, 1989年11月4日, 間野隆裕 採集

【分布の概要】

三重県大紀町 (Type locality)、いなべ市、徳島県海南町、新潟県糸魚川市、岐阜県美山町、愛知県新城市で分布が確認されている。生息地はいずれも石灰岩や蛇紋岩地帯である。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

成虫は年1回晩秋(10～11月)に出現する。卵越冬で、翌年4～5月に幼虫は出現。ツゲの若芽のみを摂食する単食性。本種幼虫は中令までは、エチゴハガタヨトウ幼虫とよく似ており、若令での識別は難しい。老熟すると、土中で幼虫態のまま越冬し、9月頃蛹化する(中村・船越, 1990)。なお、本種は自然状態ではツゲ固有種と考えられるが、飼育下ではセイヨウツゲでも飼育できる(西原 未発表)。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の生息地は、新城市鳳来黄柳野のツゲ自生地(国指定天然記念物)1ヶ所のみ。生息場所は狭く、限定的で個体数も少ないことから、周辺環境の影響を受けやすい。

【保全上の留意点】

生息場所のツゲ自生地と周辺の生息環境を保全する必要がある。

【特記事項】

岐阜県(2002)では準絶滅危惧種にランクされている。

【引用文献】

中村正直・船越進太郎, 1990. イセキリガの幼生期: ツゲを食する6番目の蛾の発見. 蛾類通信, (160): 162-168.

オオチャバネヨトウ *Nonagria puengeleri* (Schawerda)

【選定理由】

沼地、河川敷あるいは自然堤防の後背湿地などは、埋め立て、干拓や河川改修によって年々消失しつつある。本種はこのような場所に育成するガマに寄生して生息している蛾で、その生息条件は悪化している。

【形態】

開張は♂で 40mm 内外、♀で 50mm を超える。前翅は黒ずんだ暗褐色、中室下縁に沿う黒色条と中室端に 1 小白点を表す。後翅は黄白色、♀の腹部は極めて長い。

【分布の概要】

【県内の分布】

田原市の記録（田中ほか，1991）が唯一である。

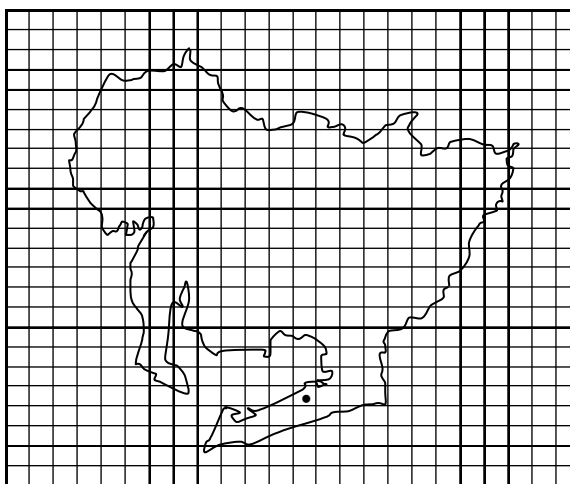
【国内の分布】

愛知県以外では、北海道、東北地方（青森、秋田、岩手、宮城、の各県）、関東地方（茨城、栃木、千葉、神奈川、群馬の各県）、中部地方（新潟、長野、岐阜、静岡、石川の各県）、滋賀県、三重県、岡山県、香川県、福岡県、対馬から確認されている。しかしいずれの道県も限られた産地からの記録である。

【世界の分布】

中東のイラクでも知られる。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

大型の湿性単子葉植物の芯喰虫（borer）で、ガマの茎内から幼虫が得られている。全国的に産地はいずれも沼沢地であるが、一般に灯火では♂の方が採集し難い。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

1980 年代以降、本種の生息地とされる県内各地の沼沢地でライトを用いた多くの蛾類調査が行われているが、上記 1 例の採集記録があるにすぎない。雄の走光性が弱いことが確認されない一つの原因かもしれないが、食草を含めほかに何らかの生息条件があると考えられるが、今のところ不明である。本種が生息可能な沼沢地は減少傾向にあるので楽観視はできない。

【保全上の留意点】

平野部の湿性環境が生息域であるため、今後の開発、改修に伴う生息地の減少になお一層の注意を必要とする。

【引用文献】

田中 蕃ほか, 1991. 愛知県の蛾類. 愛知県の昆虫, (下): 96-416. 愛知県.

【関連文献】

工藤広悦, 1985. 沼沢地の蛾. 月刊むし, (174): 8-15.
井上 寛ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社. 東京.

エゾスジヨトウ *Doerriesa striata crambiformis* Sugi

【選定理由】

生態は必ずしも正確に把握されていないが、貧栄養湿地から得られており、生息環境が限定され危機的状況にあると考えられる。

【形態】

開張 20～26mm。前翅は灰褐色に橙褐色を混じる。各横線を欠き、翅脈に沿う暗色の条線が目立つタテスジ型の斑紋の蛾である。後翅は淡い灰黄色～白色を呈する。

【分布の概要】

【県内の分布】

岡崎市（三浦，1985；松井，1991）、瀬戸市（間野，1987）、豊田市（田中ほか，1991；田中ほか，2005）の記録のほか、今回豊田市下川口でも得られた（間野・宮野，2008）。

【国内の分布】

北海道（井上ほか，1982）、青森県（葛西，1988、佐々木，1993）、栃木県（工藤，1990）、岐阜県（船越，1983・1984、尾藤ほか，1988）、三重県（間野，2004）、京都府（吉安・金野，1989）など散発的な記録がある。

【世界の分布】

現状では日本特産種

【生息地の環境 / 生態的特性】

幼虫の食草など生態的に未知な部分が多い。採集記録などから、モウセンゴケを伴う傾斜地の貧栄養湿地が本種の生息環境と推測される。このような生息環境は、ヒメコミズメイガやシラユキコヤガの生息地に一致し、オオチャバネヨトウ *Nonagria puengeleri* (Schawerda) の生息環境よりも条件が厳しいと思われるが、現在のところ本種の方が生息確認場所は多い。成虫は6～8月に得られている。いずれの産地でも得られた個体数はわずかである。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

今回の現地調査ではかつての生息地の多くが、土地改変などによって生息できない状況となっていた。生活史が未知なこともあり県内分布の動向は不明な点が多いが、生息地である湿地の減少が、もっとも危惧される。

【保全上の留意点】

平野部から丘陵に移行する地域の湿原は、都市の発展と共に非常に少なくなった。これからさらに減少傾向にあると考えられる。何らかの保全対策が急務である。

【引用文献】

- 尾藤成人・遠藤弘志・笠井初志・藤原麒一朗，1988. 岐阜県におけるエゾスジヨトウの記録について. 誘蛾燈，(111): 33.
船越進太郎，1983. 岐阜県産ヤガ 21 種の追加記録. 誘蛾燈，(83): 129-133.
船越進太郎，1984. 岐阜県美濃市休耕田の蛾類. 誘蛾燈，(97): 117-127.
井上 寛ほか，1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社. 東京.
葛西 充，1988. 「青森県の蛾(VI)」の追加記録. 誘蛾燈，(113): 99-190.
工藤広悦，1990. ワタナベカレハとエゾスジヨトウの分布記録. 月刊むし，(231): 37.
間野隆裕，1987. エゾスジヨトウ愛知県で採集. 誘蛾燈，(110): 126.
間野隆裕，2004. 第5章 昆虫 第10節 チョウ目(ガ類). 上野市史 自然編: 723-747, 995-1030. 上野市.
間野隆裕・宮野昭彦，2008. カバフキシタバ・シラユキコヤガ・エゾスジヨトウの愛知県豊田市の記録. 誘蛾燈，(194): 105-107.
松井直人，1991. 岡崎市本宿町の蛾. 虫譜，29 (2): 1-32.
三浦重光，1985. 岡崎市の蛾類. 新編岡崎市史 14 自然編: 853-972.
佐々木明夫，1993. 青森県下北で得た蛾数種. 誘蛾燈，(134): 89-90.
田中 蕃ほか，1991. 愛知県の蛾類. 愛知県の昆虫，(下): 96-416. 愛知県.
田中 蕃・間野隆裕・蟹江 昇・高橋匡司・岩月 学・小林広成・有田玲子・山田真澄，2005. 豊田市自然環境基礎調査報告書: 本編Ⅶ 昆虫類: 181-323. 資料編Ⅴ 昆虫類: 105-385. 豊田市.
吉安 裕・金野 晋，1989. 京都未記録の蛾. 蛾類通信，(155): 72.

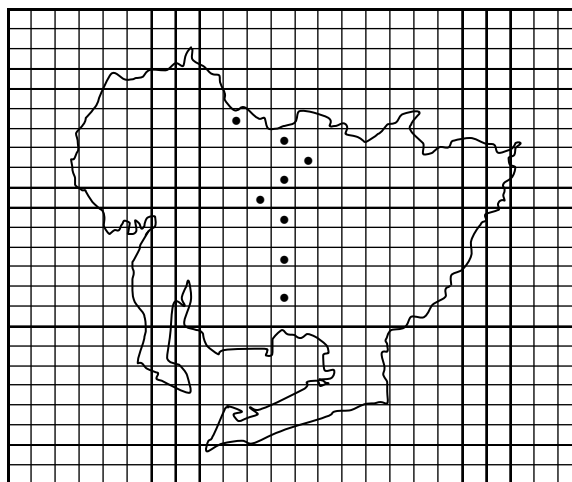
【関連文献】

工藤広悦，1985. 沼沢地の蛾. 月刊むし，(174): 8-15.



豊田市下川口，2008年6月10日，間野隆裕 採集

県内分布図



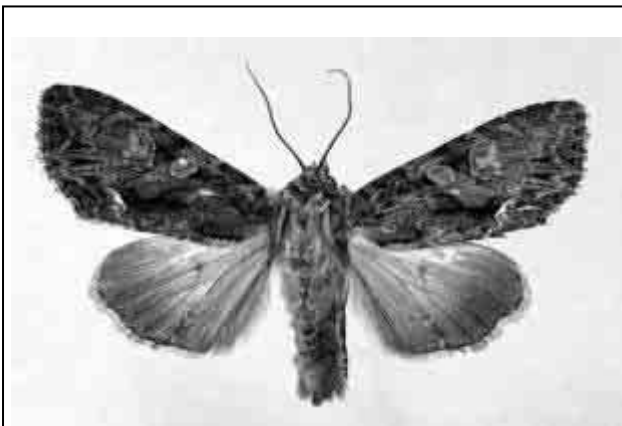
エチゴハガタヨトウ *Asidemia inexpecta inexpecta* (Sugi)

【選定理由】

全国的に記録は少なく、限られた特異環境に生息する。県内の生息地は一ヶ所のみである。

【形態】

開張 38mm～41mm。前翅は黒褐色または茶褐色で明瞭な腎状紋を有する。後翅は褐色。

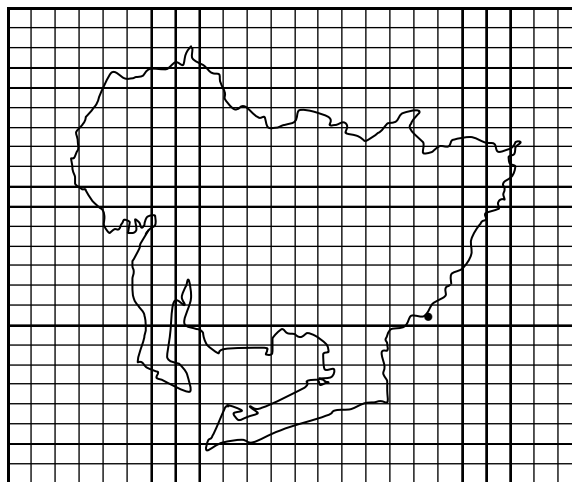


岐阜県山県市伊往戸, 1988年6月18日, 間野隆裕 採集

【分布の概要】

本州、佐渡島、四国、奄岐島、九州に分布するが、いずれも局所的で石灰岩・蛇紋岩地帯に限定されている。県内では、新城市鳳来黄柳野のツゲ自生地から記録されているだけである。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

成虫は年2回の発生で、5～6月、8～10月に出現する。卵越冬。幼虫は黄緑色の体色で、ツゲを摂食。老熟すると、土中へ潜って蛹化する。第1化幼虫は同じくツゲを食するイセキリガ幼虫とほぼ同時期に見られるが、黄柳野では本種幼虫の方が多く見られるという(中村・船越, 1990)。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の生息地は、新城市鳳来黄柳野のツゲ自生地(国指定天然記念物)1ヶ所のみ。生息場所は狭く、限定的で、存続に不安がある。

【保全上の留意点】

ツゲ自生地とその周辺環境の保全を必要とする。

【特記事項】

福岡県では準絶滅危惧種にランクされている。

【引用文献】

中村正直・船越進太郎, 1990. イセキリガの幼生期：ツゲを食する6番目の蛾の発見. 蛾類通信, (160): 162-168.

【関連文献】

大和田守・山本光人, 1983. “岩場の蛾”に関する新発見. 蛾類通信, (122): 345-352.

間野隆裕・宮崎弘規, 1988. 愛知県鳳来町で採集した蛾. 誘蛾燈, (111): 23-29.

杉 繁郎(編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑: 207, pl.100. 講談社, 東京.

カバフキシタバ *Catocala mirifica* Butler

【選定理由】

県内での生息が限定され、わずかな記録しかみられないが、その生息地である人里周辺にある温帯落葉樹林の二次林は、宅地や人工的公園の造成などによる開発や、目的のない雑木林の伐採などによって、本種存続の脅威が高まっている。

【形態】

開張 51～55mm、前翅は灰白色を帯び、翅頂部に大きな暗色斑を表す。後翅の帯状に見られる黄色はかなり濃く、黒色帯の幅は狭い。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市猿投町、御船町（田中ほか，1991）、六所山（愛知県，2002）で採集されている。いずれも 20 年以上前の記録であったが、2008 年豊田市内の木瀬町と下川口町において再確認された（間野・宮野，2008）。

【国内の分布】

栃木県以西の関東から中国地方にかけて分布。兵庫県、岡山県、島根県には産地も多い。中部地方では本県のほか三重県、岐阜県、長野県、福井県に採集記録がある。現在東海地方での恒常的な産地は伊賀市青山高原（松井，1993）のみである。

【世界の分布】

現状では日本特産種。

【生息地の環境 / 生態的特性】

幼虫はバラ科のカマツカから発見されている。

成虫はアカマツの根元などに生える地衣類に擬態し、昼間は明るい二次林の地衣類が生えたアカマツの幹などに静止しているという。土地条件の悪いアカマツの明るい感じの二次林内で 7～8 月頃成虫が出現する。

本種成虫がライトに誘引される時間帯は、深夜から明け方である場合が多い。したがってライトを用いた成虫の生息確認調査では、調査時間帯に注意が必要である。成虫は樹液にも来るが、同属種の中でもっとも得にくい種の一つとなっている。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

今回の現地調査では文献上に示された場所での生息は確認できなかった。これまで県内で記録された一部の地点は、食樹が伐採されるなど環境変化が甚だしく、現在の生息は全く期待できないと思われる。また食樹のカマツカは県内に広く分布しているにもかかわらず本種が生息確認されていない理由については不明である。他県においてもかつての記録地は激減しているが、その理由は不明である。

【保全上の留意点】

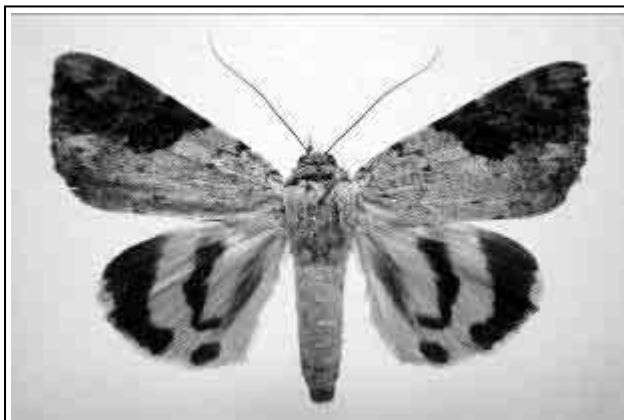
アカマツの生育する二次林や里山の保全などにより、少なくとも食樹であるカマツカを残存させ、生息環境を残す事が急務。

【引用文献】

- 間野隆裕，2005. 鈴鹿市でカバフキシタバを採集. ひらくら，49 (4): 65.
松井弘見，1993. 阿山郡大山田村でカバフキシタバを採集. ひらくら，37 (6): 104.
田中 蕃ほか，1991. 愛知県の蛾類. 愛知県の昆虫，(下): 96-416. 愛知県.
愛知県，2002. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち—動物編—. 愛知県.

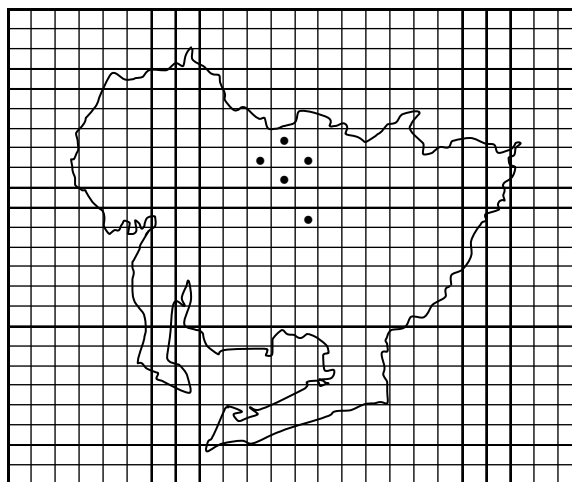
【関連文献】

- 間野隆裕，2004. 第 5 章 昆虫 第 10 節 チョウ目(ガ類). 上野市史 自然編: 723-747, 995-1030. 上野市.
間野隆裕，2008. 第 5 章 昆虫類 第 13 節 鈴鹿市のガ類. 鈴鹿市の自然—鈴鹿市自然環境調査報告書—: 742-792. 鈴鹿市.
間野隆裕・宮野昭彦，2008. カバフキシタバ・シラユキコヤガ・エゾスジトウの愛知県豊田市の記録. 誘蛾燈，(194): 105-107.
坂部元宏，1966. 三重県でとれた珍しいガ類(X X III)カバフキシタバ. ひらくら，10 (12): 104.



豊田市木瀬町，2008 年 7 月 24 日，間野隆裕 採集

県内分布図



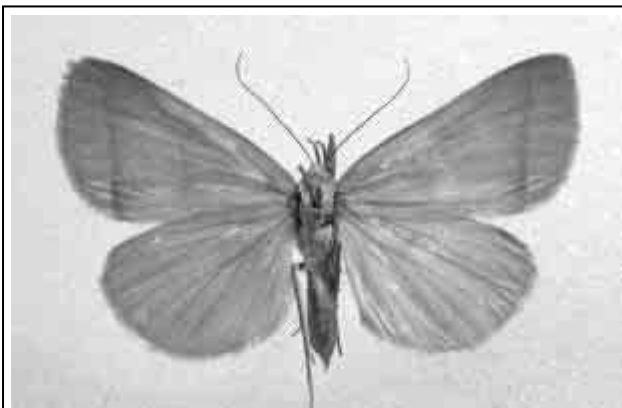
オオキイロアツバ *Pseudalelimma miwai* Inoue

【選定理由】

ツゲ固有のガで、生息環境が特異で県内の産地は極めて限定されている。

【形態】

開張 40～46mm、前後翅とも羽全体が黄色、黒色の外横線が前翅に薄く現れる。♂の触角は両櫛歯状で外側の櫛歯は非常に長い。下唇髭は長く鎌状に上反する。1属1種である。



新城市黄柳野, 2008年6月7日, 乙部 宏 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

新城市黄柳野（間野・宮崎，1988）の記録が唯一。

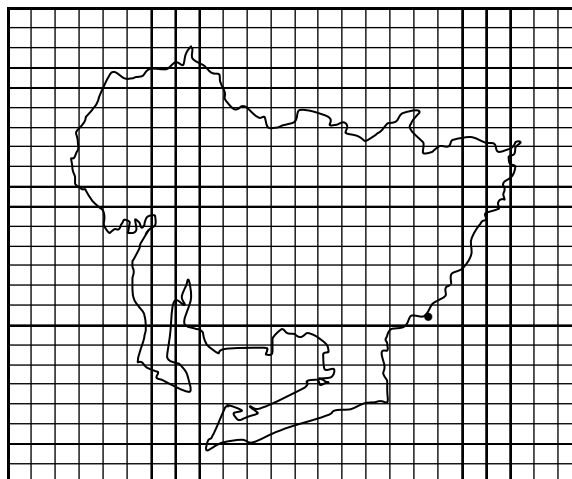
【国内の分布】

新潟県、東京都、岐阜県、三重県、奈良県、岡山県、広島県の限られた地域で記録されている。

【世界の分布】

現状では日本特産種。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

幼虫はツゲを食す石灰岩性の蛾で、県内では蛇紋岩地帯に発達するツゲ群落で確認されている。成虫は6～7月頃と9～10月に発生する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

生息地は保護され少ないながらも比較的安定しているが、孤立した生息地であるため予断を許さない。

【保全上の留意点】

幼虫の野外での食草がツゲのみであることから、ツゲの生育を保全する。

【引用文献】

間野隆裕・宮崎弘規, 1988. 愛知県鳳来町で採集した蛾. 誘蛾燈, (111): 23-29.

【関連文献】

杉 繁郎ほか, 1987. 日本産蛾類生態図鑑. 講談社. 東京.

山田乙三, 1965. 坂本谷の蝶と蛾. ひらくら, 9 (7): 109-110.

山下善平ほか, 1963. 鈴鹿山脈の昆虫. 鈴鹿山脈自然科学調査報告: 119-288. 三重自然科学研究会.

山下善平ほか, 1980. 神宮境内地昆虫調査報告書. 神宮司庁.

オオゴキブリ *Panesthia angustipennis spadica* (Shiraki)

【選定理由】

良好な自然林（二次林を含む）の朽木中に生息しているが、森林伐採などで生息環境が縮小されている。南方系の種であることから平野部に分布の主体があるが、三河山間部からも知られている。なお、昨今の温暖化による土地の乾燥化が進み、本種の生息する樹林林床の枯朽木の状態が悪化。本種の存続に負荷がかかっている模様。

【形態】

体長は37～41mm。体は太く、光沢のある漆黒色。前胸背は前部と中央に小突起を有する。枯朽木内など狭い空間に住んでいるため成虫の翅は擦り切れていることが多い。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県では比較的各地から記録されているが、河川に沿って内陸に分布が広がっている。

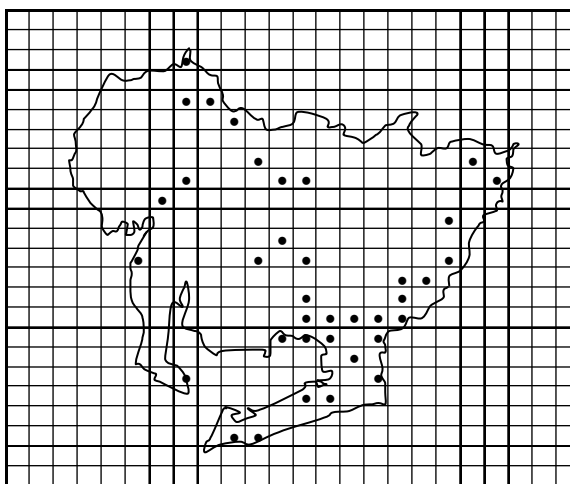
【国内の分布】

本州、四国、九州。海岸線に沿った地域に多い。

【世界の分布】

台湾。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

県内では主として海岸線に近い照葉樹林に生息しているが、環境適応性の幅も広く、落葉広葉樹林や針葉樹林にも生息している。生態については朽木内で坑道を掘って家族生活をしている以外ほとんど何も判っていない。

副次的ながら、本種は他の南方系種類、特に枯朽木内など類似の環境で生活する外国産クワガタムシやカブトムシ類の「越冬可能地」推定のための「指標種」にもなり得るかと思われる。

【現在の生息状況／減少の要因】

朽木内生活のため、発見・確認に手間はかかるが、かならずしも個体数は少なくない。ただし、県内の主要分布地が平野の樹林であることから、開発によってその生息環境が失われていく状況は続き、楽観は許されない。なお、温暖化による枯朽木の過度の乾燥化は不利であるが、本来が南方系の本種にとって温暖化は有利かとも思われるが、こうした評価はまだ出ていないようだ。

【保全上の留意点】

残された樹林を林床と共に保全することが最大の保護につながると考えられる。

【関連文献】

- 朝比奈正二郎, 1988. 日本産ゴキブリ分類ノート, XVII. オオゴキブリ族の種類. 衛生動物, 39 (1): 53-62.
朝比奈正二郎, 1991. 日本産ゴキブリ類. 中山書店, 東京都.

ミカワクチキウマ *Anoplophilus okadai* Ishikawa**【選定理由】**

幼虫・成虫共に翅が無く、移動能力に乏しい。また林床性のため、生息地の樹林が分断されるだけで孤立化し存続に悪影響を被りやすい。一方、本種の主な生息地である山地のブナ・ミズナラ原生林は減少傾向にあり、良好な環境が失われつつある。

【形態】

体長は♂16mm、♀18～23mm。無翅。猫背でズングリした体型。全体に光沢があり体節は明瞭。体色は暗い褐色で淡色の斑点を散布する。♀の産卵管は長く鋸歯は5つで、近似のチビクチキウマから区別できる。

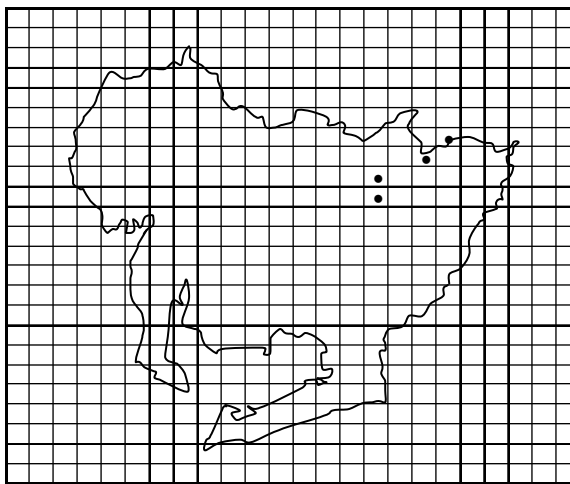
【分布の概要】**【県内の分布】**

主に三河北部の樹林地帯に生息。近似のチビクチキウマとの混生地もある(岡田, 2004)。

【国内の分布】

本州。

県内分布図

**【生息地の環境 / 生態的特性】**

主に山地のブナ・ミズナラ原生林の湿潤な林床に生息。倒木の樹皮下や丸まった枯葉の中などに隠れている。二次林でも生息は可能。成虫は8～10月に見られる。幼虫で越冬。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

ブナ林が比較的良く残されている豊田市(旧稲武町)や設楽地域の一部は別とし、生息地によっては伐採やレクリエーション施設などのため環境が破壊されている所もあり、今後の存続が懸念されている。

【保全上の留意点】

現存のブナ・ミズナラ原生林を維持すること。特に湿潤な林床環境を維持し倒木や枯葉など本種の生活の場を確保すること。したがって林床などの過度の整備・清掃は行わないこと。

【特記事項】

最近まで1種類とされていた県内産のクチキウマは、形態的に酷似する2種類(ミカワクチキウマとチビクチキウマ)が混在していることが解明された(ISHIKAWA, 2003)。両種それぞれの生態的特性などはまだ良くわかっておらず、本調査では暫定的に両種ともリストアップした。なお上記以外に未発見の第3の種類が生息している可能性もあり要注意である。

【引用文献】

岡田正哉, 2004. 愛知県のクチキウマ類の分布記録. 佳香蝶, 56 (217): 20-21

ISHIKAWA Hitoshi, 2003. Anoplophilus species in Japan (Orthoptera, Rhaphidophoridae, Protrogophilinae).

Tettigonia, (4): 7-23.

【関連文献】

岡田正哉, 1991. 愛知県の直翅目(2). 愛知県の昆虫, (下): 5-20. 愛知県.

チビクチキウマ *Anoplophilus minor* Ishikawa**【選定理由】**

幼虫・成虫共に翅が無く、移動能力に乏しい。また林床性のため、生息地の樹林が分断されるだけで孤立化し存続に悪影響を被りやすい。一方、本種の主な生息地である山地のブナ・ミズナラ原生林は減少傾向にあり良好な環境が失われつつある。

【形態】

体長は♂11～16mm、♀11～20mm。無翅。猫背でズングリした体型。全体に光沢があり体節は明瞭。全身褐色だが一般に黄褐色味が強く、黒褐色斑点を散布する。♀の産卵管は太く短くその鋸歯は6～7つで、近似のミカワクチキウマから区別できる。

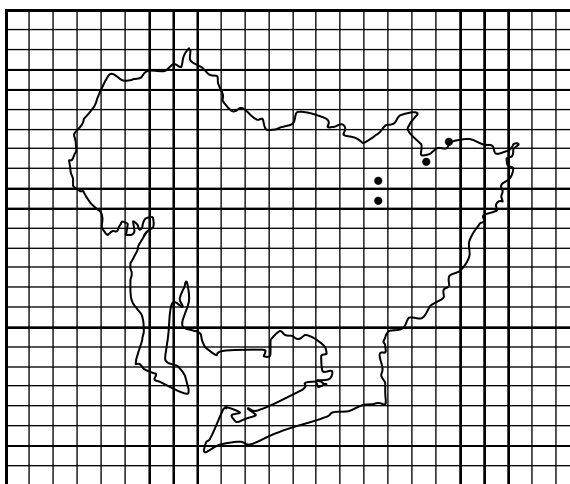
【分布の概要】**【県内の分布】**

主に三河北部の樹林地帯に生息。近似のミカワクチキウマとの混生地もある（岡田，2004）。

【国内の分布】

本州、九州。

県内分布図

**【生息地の環境／生態的特性】**

主に山地のブナ・ミズナラ原生林の湿潤な林床に生息。倒木の樹皮下や丸まった枯葉の中などに隠れている。二次林でも生息は可能。成虫は7～10月によく見られる。幼虫で越冬。

【現在の生息状況／減少の要因】

ブナ林が比較的良く残されている豊田市（旧稲武町）や設楽地域の一部は別とし、生息地によっては伐採やレクリエーション施設などのため環境が破壊されている所もあり、今後の存続が懸念されている。

【保全上の留意点】

現存のブナ・ミズナラ原生林を維持すること。特に湿潤な林床環境を維持し倒木や枯葉など本種の生活の場を確保すること。したがって林床などの過度の整備・清掃は行わないこと。

【特記事項】

最近まで1種類とされていた県内産のクチキウマは、形態的に酷似する2種類（ミカワクチキウマとチビクチキウマ）が混在していることが解明された（ISHIKAWA, 2003）。両種それぞれの生態的特性などはまだ良くわかっておらず、本調査では暫定的に両種ともリストアップした。なお上記以外に未発見の第3の種類が生息している可能性もあり要注意である。

【引用文献】

岡田正哉, 2004. 愛知県のクチキウマ類の分布記録. 佳香蝶, 56 (217): 20-21

ISHIKAWA Hitoshi, 2003. Anoplophilus species in Japan (Orthoptera, Rhaphidophoridae, Protrogophilinae).

Tettigonia, (4): 7-23.

【関連文献】

岡田正哉, 1991. 愛知県の直翅目(2). 愛知県の昆虫, (下): 5-20. 愛知県.

タイワンクツワムシ *Mecopoda elongata* (Linnaeus)**【選定理由】**

1950年代後半に岡崎を中心とする三河地方で発見されたが、なぜかその後の本種の記録は最近までほとんどが途絶えていた。ただその中で、本種の阿久比町での存在は1986～2001年にわたって記録され(相地, 2002)、今回の調査で少なからぬ個体数を確認できた。

本来は南方系である本種の今後の存続の可否や近縁のクツワムシとの競合はどうかなど継続調査が必要である。

【形態】

体長(頭～翅端)は♂♀ともに50～58mm。クツワムシに似るが、本種のみでは翅が細く長いこと、♀では産卵管がゆるく上方に反っていることなどで区別できる。褐色個体と緑色個体が見られる。南西諸島産は一般に大型。

【分布の概要】**【県内の分布】**

三河地方や名古屋地方の平地部～低山地、知多半島、渥美半島。矢作川や豊川沿いに内陸部へ入っている。

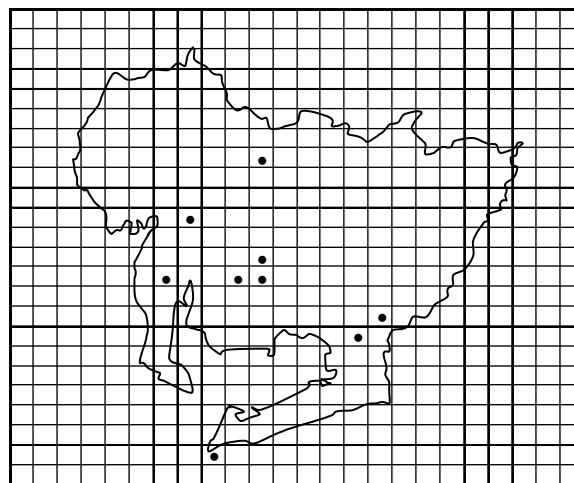
【国内の分布】

本州、四国、九州。伊豆八丈島。南西諸島。

【世界の分布】

台湾、熱帯アジア。

県内分布図

**【生息地の環境 / 生態的特性】**

造成地、大小河川の堤防や河川敷などの雑草地。セイタカアワダチソウ、ヨモギ、イタドリなどにクズが絡まっているような環境を好む。夜間に♂は時々飛ぶが♀はしばしば地面上を歩く。鳴き声は大きく「ギュルル・・・、ギュルル・・・」という前奏のあと「ジャーーーー」と騒々しく鳴く。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

2006年現在で生息が確認できたのは阿久比町のみ。ここでは調査中には常に1～2頭の鳴き声が聞こえた。しかし、クツワムシの声は聞こえず、ここでは混生していない模様。この他過去の記録地の大部分は河川改修や開発行為により生息地そのものが消失した。

2008年9月現在も阿久比町の生息地は健在で個体数も少なくはなかった。

【保全上の留意点】

主な生息環境である河川敷や堤防法面の草叢を残すこと。草は刈り過ぎず、クズなどが絡んだ高茎草本も適度に残すこと。

【引用文献】

相地 満, 2002. タイワンクツワムシは今. 風の便り, (6): 6-7. 風の館, 愛知県.

【関連文献】

環境省, 1980. 日本の重要な昆虫類 東海版.

ギフヒシバッタ *Tetrix gifuensis* Storozhenko, Ichikawa et Uchida

【選定理由】

本種は、1994年に記載されたもので、豊田市猿投山産1♂1♀がパラタイプに指定されている。本種は、主に湿地に関連する環境に生息するが、こうした環境は開発されやすく、今後の動向が懸念される。

【形態】

ごく小型のバッタ。体長は♂7～8mm、♀8～9mm。前胸背が長く後方へ延び、背面からは菱形に見える。体色は赤褐色～灰褐色で背面には1～2対の黒色斑点がある。しかし体色や斑紋は個体変異の巾が広い。同所的に混生するハラヒシバッタやヤセヒシバッタに比べ本種の後翅は明らかに短い。

【分布の概要】

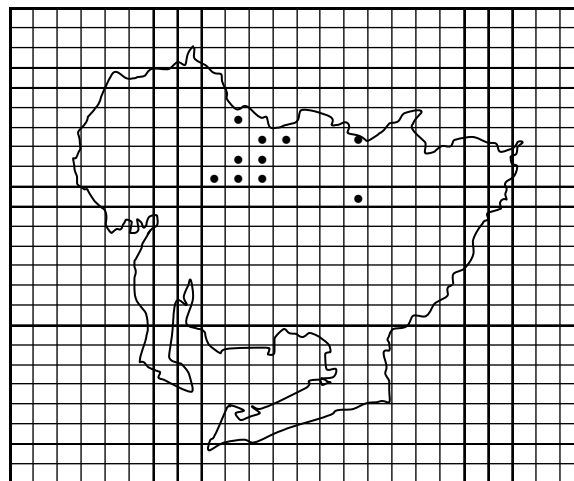
【県内の分布】

瀬戸市～豊田市旭地区の県北部を中心に記録がある。湿地環境との関連が見られるが調査はまだ不十分である。

【国内の分布】

本州（愛知県、岐阜県）。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

湿地、もしくは溪流や池などに近い湿性環境に見られる。低い草がまばらに生えているような環境が良く、密生した草地は好まない。同一生息地内でも局所的に群がることが多い。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

一部の地域で道路新設や造成のために生息地が削られた例もあるが、全体的には各生息地とも差し迫った状況にはない。これとは別に自然現象ではあろうが、県内の各湿地は最近乾燥化が目立つ。いずれ本種の存続に悪影響を及ぼすものと思われる。

【保全上の留意点】

本種は小型であり移動能力も乏しい。本種が好む湿地とその水源地を確保する必要がある。生息環境としては草が密生せずまばらに生える程度の状態が望ましい。

【関連文献】

Storozhenko S.Y., A. Ichikawa and M. Uchida, 1994. Review of Orthoptera of the Eastern Palearctica. Genus *Tetrix* Latreille (Tetrigidae, Tetriginae), Part 2. New Entomol., 43 (3,4): 43-54.

ホンドエダナナフシ *Phraortes illepidus* (Brunner von Wattenwyl)

【選定理由】

本種は、県内に広く分布するが、各生息地域の個体群により生殖的には「両性生殖」系と「単為生殖」系とがあること、形態的には「フアリ型」と「フナシ型」があること、さらに体の大きな個体群と小さな個体群があることなど「種」内の変異が大きい。県内の広い範囲に分布地が散在しそれぞれの特徴を有する多様な地域個体群が認められる（岡田，1990；丹羽，2000）。

【形態】

全体に細長い枝状で♂の方がより細い。体長は♂65～82mm、♀82～112mm。全伸長は♂111～143mm、♀124～168mm。♂・♀ともに無翅。触角は前脚とほぼ同じかより長い。体色は「緑色型」と「褐色型」がある。後者には暗褐色、赤褐色、灰褐色など色調に大きな変異がある。体側には赤紅色条が明瞭。これは♂個体や緑色型個体で顕著だが褐色型個体では不明瞭となることがある。

♂には、各脚の腿節・脛節の末端部に黒色斑点のある「フアリ型」と、その無い「フナシ型」とが見られる。

【分布の概要】

【県内の分布】

篠島や伊勢湾／三河湾沿岸のような平地から、豊田市（旧稲武町）など 1,000m を超える高標高地にまで分布する。ただし、分布範囲は広いが既知の生息地は局所的である。

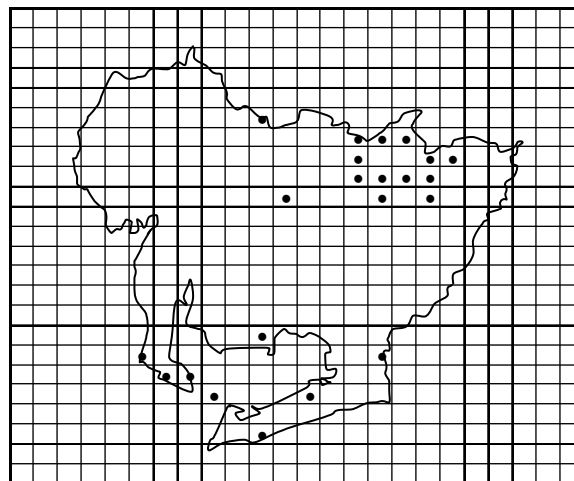
【国内の分布】

本州（青森県以南）、四国、九州。

【世界の分布】

台湾に生息する（黄，2002）というが、日本産とは成虫・卵の外部形態に差があり、再確認の必要がある。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

食性は広く、ブナ科、バラ科を主とし、さらにイタドリ（タデ科）、ハギ（マメ科）など各種の植物を食べる。これらの植物を含む明るい雑木林やその林縁に生息する。比較的局所的に生息すること、生息環境の植物に良く擬態していることなどから見出すのが困難なときもある。夏季は夜間にも活動する。

【現在の生息状況／減少の要因】

目立つ減少は認められないが、主な生息場所である雑木林的な環境が減ったり、地域整備などのため本種の生息地が造成されたりしており、一部地域での環境悪化がある。

【保全上の留意点】

本種は樹上性で、♂・♀とも無翅、移動能力は乏しい。小規模開発であっても大きな影響を受けやすい。基本的には各種広葉樹を含む雑木林あるいは里山的环境を維持すること。

【引用文献】

- 岡田正哉，1990. 愛知県のナナフシ目. 愛知県の昆虫, (上): 95-96. 愛知県.
丹羽 力，2000. 本州産エダナナフシの単為生殖について. インセクトリウム, 37 (10): 20-23.
黄 世富，2002. 台湾の竹節虫: 88-89. 大樹文化, 台北市.

【関連文献】

- 岡田正哉，1999. エダナナフシ. ナナフシのすべて: 22-23. トンボ出版, 大阪.
岡田正哉，2003. 速報！与那国島からエダナナフシ属の‘未知’種. ぱったりぎす, (134): 16-17.

ホッケミズムシ *Hesperocorixa distanti hokkensis* (Matsumura)

【選定理由】

全国的にも産地は局所的である。抽水植物が繁茂する水質良好な溜め池やワンドなどに生息するが、そのような環境が激減している。平地に分布するため環境悪化の影響を受けやすい。

【形態】

体長は 9.5～11mm で、通常は 10mm を超える大型種である。♂の顔面は中央部が凹み、前脚跗節は基部から先端部にかけて幅広くなる。前胸背板着色部の黒色横帯は、通常 8～9 本である。

【分布の概要】

【県内の分布】

田原市、豊橋市、岡崎市、安城市、春日井市などで記録されているが、その多くは誤同定の可能性がある。

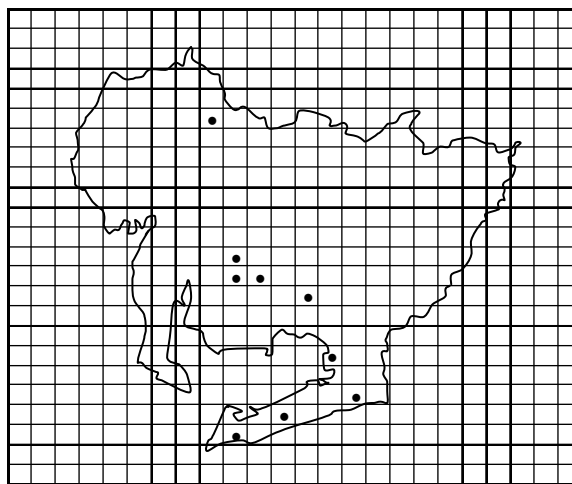
【国内の分布】

本州（山形県以南）、四国、九州。

【生息地の環境 / 生態的特性】

沿岸部に近い平地の溜め池などに生息し、抽水植物が繁茂する環境に多い。古くから存在する良好な止水環境に依存すると考えられる。灯火に飛来することがある。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

近年の信頼できる確実な産地は田原市の 1 ヶ所のみである（矢崎・石田, 2008）。おそらく渥美半島や知多半島など沿岸部の低地を中心に生息するものと考えられる。水質悪化や溜め池の埋め立てなどにより減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

現在残された平野部の溜め池の保全に努めることが望まれるが、まずは正確な分布資料を明らかにする必要がある。

【特記事項】

過去の記録はミヤケミズムシ *Xenocorixa vittipennis* (Horváth) など近縁の別種を誤認していることがほとんどで、標本の再検討が必要である。

基亜種であるミズムシ *H. d. distanti* (Kirkaldy) は北海道と本州（青森県）に分布し、北海道では個体数も多く比較的普通に確認される。

【引用文献】

矢崎充彦・石田和男, 2008. 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60 (234): 165-200.

【関連文献】

浅岡孝知, 1999. カメムシ目. 豊橋市自然環境保全基礎調査報告書, (資料編): 65-73. 豊橋市.

浅岡孝知・家城 司, 1990. 愛知県の異翅目. 愛知県の昆虫, (上): 123-162. 愛知県.

オヨギカタビロアメンボ *Xiphovelina japonica* Esaki et Miyamoto

【選定理由】

全国的に産地は局所的である。河川に生息する流水性の種であるが、もともと産地が少なかった上に、水質悪化などにより多くの場所で絶滅したとされている。

【形態】

体長は約 2mm の微小種である。体色は黒色で、中胸背、腹部背板、結合板に銀灰白色毛による紋がある。♂は小判形、♀は菱形の体型を呈する。通常は無翅型であるが、稀に有翅型が出現する。

【分布の概要】

【県内の分布】

矢作川とその近隣の溜め池でのみ確認されている。

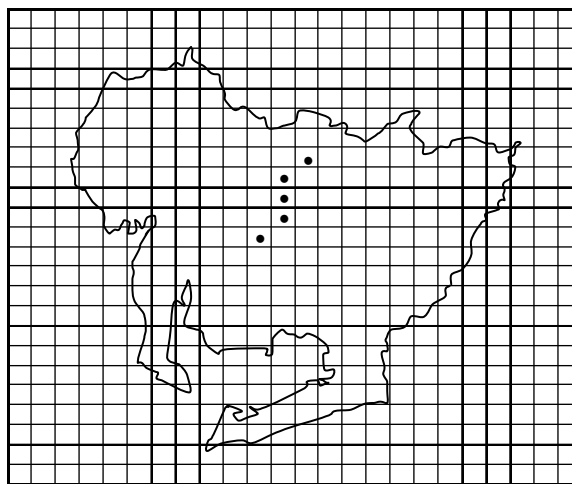
【国内の分布】

本州（愛知県、岐阜県、三重県、京都府、広島県、山口県）、四国（徳島県）、九州（福岡県）。

【生息地の環境 / 生態的特性】

主として川幅の広い大河川の中流域から上流域にかけて分布し、ツルヨシなどが繁茂する川岸の緩流域に生息している。河川の流入などがある溜め池に生息する場合もある。生息地では多数の個体が群生していることがあり、水面上を高速で疾走する。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

矢作川では中流域から上流域にかけて広く生息している。豊田市自然観察の森にある溜め池では、樹木の葉などによって日陰となった場所に多く見られる。護岸工事や水質悪化により減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

河川整備においては、水辺の緩流域やワンドなどを極力残し、川岸の植生維持に努める必要がある。溜め池に生息する場合も水辺の植生を保護し、周辺の樹林帯も必要以上に伐採しないようにする。

【特記事項】

ごく最近東海地方に産することが明らかにされ、現在、愛知県が分布東限となっている（矢崎・石田, 2008）。東海地方以西の近年の記録は、いずれも溜め池におけるもので、矢作川に生息する個体群は学術的にも貴重と考えられる。

【引用文献】

矢崎充彦・石田和男, 2008. 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60 (234): 165-200.

【関連文献】

林 正美・大原賢二・岩崎光紀, 2003. 徳島県の水生半翅類. 徳島県立博物館研究報告, (13): 1-27.
大木克行, 2001. オヨギカタビロアメンボの新産地. Rostria, (50): 47-48.

ニシキキンカメムシ *Poecilocoris splendidulus* Esaki

【選定理由】

大型のキンカメムシの仲間でも特に美しい種である本種は、ツゲに依存している特異な生態をもつことが知られている。本県では限られた地域のみに分布している。

【形態】

体長は17～18mm、体色は金緑色で紫紅色の帯状の条斑が入っている最も美しい種である。しかし、死後は暗い色に変化する。



新城市東部, 2005年6月18日, 浅岡孝知 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

新城市東部の限られた地域にのみ記録がある。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【生息地の環境 / 生態的特性】

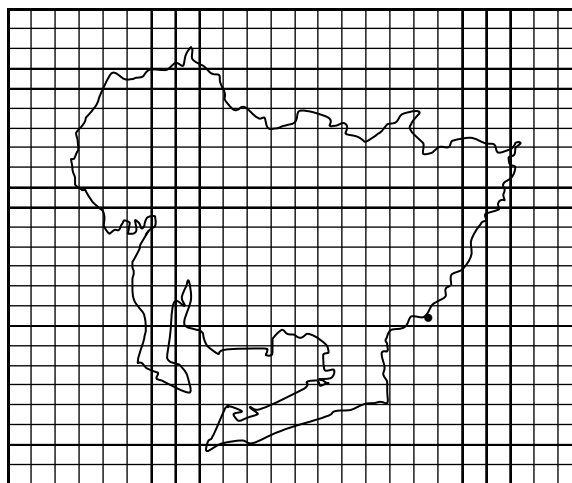
ツゲは一部保全されているが、枯死も見られるので、今後要注意である。

幼虫はツゲで育ち、その後移動するようであり、他の植物からの記録がある。幼虫はツゲの実におびただしい個体が集まっている。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

ツゲの枯死が見られ、個体数が減少傾向にある。

県内分布図



【保全上の留意点】

保全地域およびその周辺の植生を保全し、乾燥しないように周辺の環境を保全する。

【特記事項】

美麗種であるので、乱獲されないようにしたい。

【関連文献】

守屋成一・大久保宣雄, 1987. 代替餌によるニシキキンカメムシの飼育(予報). *Rostria*, (38): 558.
中村慎吾, 1990. 帝釈峽(九). 帝釈郷土館. 3-10.

クロサワツブミズムシ *Satoni kurosawai* (M.Satô)

【選定理由】

学術上の貴重種であるが、微小なことから発見しにくく、全国的にも生息地は数箇所知られているだけである。愛知県内において確認されている生息地も 1 ヶ所のみで、その生息地は林道に面しているため、林道の整備や生息地の乾燥化によって安易に消滅する可能性がある。

【形態】

体長 1.4～1.6mm。体は円形で下面は扁平。全体黒色の非常に小さな甲虫。触角は棍棒状で 11 節あり、ふ節は 4-4-4 となる。後翅は退化しており、飛翔できない。

【分布の概要】

【県内の分布】

新城市（旧鳳来町）で 1 ヶ所が知られるのみ。

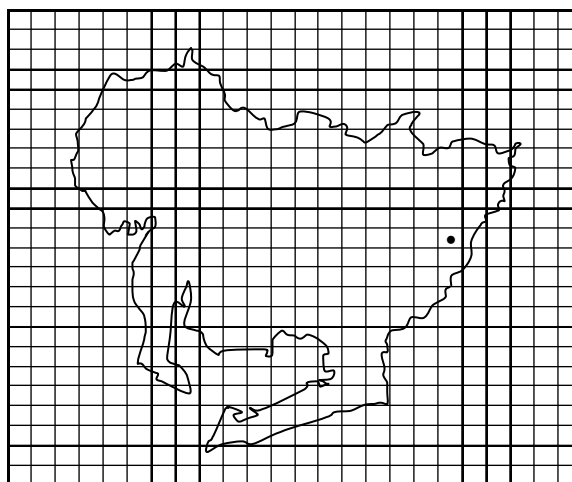
【国内の分布】

本州、四国。

【世界の分布】

日本特産の属・種であったが、近年、中国で唯一の別種が発見された。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

山の斜面で岩盤が露出した場所で、常時水が少量流れるといった特殊な環境に生息している。幼虫も同一の場所で発見できる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

特殊な環境であるため、今問題とはなっていないが、山地開発とのからみが生ずる。

【保全上の留意点】

山岳道路の拡幅は大きな減少原因のひとつとなるので、工事が施工される際には細心の注意が必要である。

【関連文献】

Satô, M., 1982. Discovery of Torridincolidae in Japan. Annot. Zool. Japon., 55: 276-283.
吉富博之, 1977. クロサワツブミズムシの中部地方からの記録. 甲虫ニュース, (117): 7.

チイワメクラチビゴミムシ *Trechiana mammalis* S.Uéno

【選定理由】

乳岩峡河童洞から発見され、1987年に新種として記載された、愛知県の固有種であるが、それ以降の採集記録は知られていない。詳細な生息状況は不明であるが、本県での絶滅は種の絶滅に直結する。

【形態】

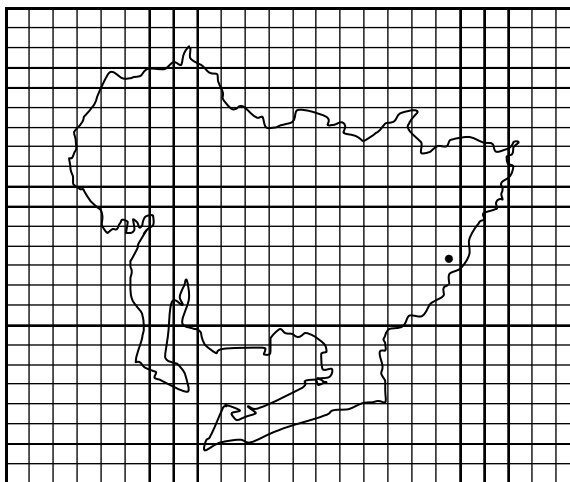
体長 5.85～5.95mm。ハベメクラチビゴミムシに近縁で、よく似るが、より大型で、前胸背が細く基部でより強く収縮すること。オス交尾器の陰茎の先端部がより細いなどの形態差によって区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

新城市（旧鳳来町）乳岩峡周辺の特産種。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

洞窟性ないしは地中性。乳岩峡河童洞内に設置されたベイトトラップに誘引されたものが採集された。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

記載時に使用された標本（1982～1986年に採集された1♂1♀）以外には知られておらず、その後決して少くない調査が試みられているが、生息に関する追加情報は得られていない。近年生息が確認できないのは、山林の乾燥化などに伴い生息地が、地中のより深い場所に移動した可能性もある。

【保全上の留意点】

著しく限られた狭い地域にしか分布しない種で、今後も乳岩周辺のみでしか発見が期待できない。したがって、本地域からの絶滅は種の絶滅に直結する。発見地の河童洞のみならず、周辺部の森林についても、乾燥化など環境が悪化しないよう、保全には十分な留意が必要。

【特記事項】

本県、新城市（旧鳳来町）乳岩峡周辺部にのみ生息する固有種である。

【関連文献】

Uéno, S., 1987. A new Anophthalmic *Trechiana* (Coleoptera, Trechini) found in a Rhyolitic Cave in Central Japan.
Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. A, 13 (1): 29-34.
佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

クロエンマムシ *Hister concolor* Lewis

【選定理由】

県内では近年の記録が途絶えている。大型のエンマムシ類のうち特に平野部に生息する種は、衛生環境の改善にともない、種の存続への圧迫が強まっていると考えられる。

【形態】

体長 6.8～9.0mm。ヤマトエンマムシよりやや小型の黒色をしたエンマムシ。上翅の第1～3背条は完全で、第4～6背条は基半部を欠く。前尾節板はやや密に、尾節板は極めて密に粗大点刻を装う。

【分布の概要】

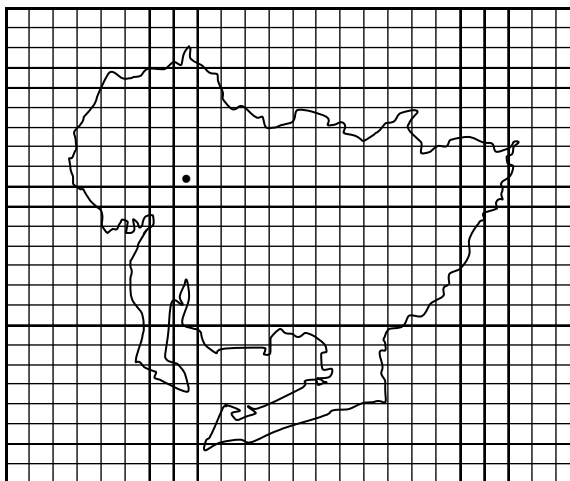
【県内の分布】

名古屋市で記録がある。

【国内の分布】

千島、北海道、本州。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

ウジ類を捕食する。やや新しい牛糞から発見される。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

本種を含め大型のエンマムシ類は、近年いずれも発見が困難になってきている。平野部の衛生環境の整備が、少なからぬ影響を与えたものと推測される。

【保全上の留意点】

ウジ類を捕食する大型のエンマムシ類の減少の背景には、野生小動物の減少や衛生環境の改善による影響が少なからずあるため、本種の保全は単純ではない。

【関連文献】

佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.
大原昌宏, 1996. 日本産エンマムシ上科解説IV. 甲虫ニュース, (116): 7.

エンマムシ *Merohister jekeli* (Marseul)

【選定理由】

近年の牧場の閉鎖や衛生環境の整備、河川改修などにより、動物の糞や遺体にわくウジ類を捕食するエンマムシ類は減少している。

【形態】

体長 8.8～12.5mm。上翅 1～4 背条が完全で、5～6 背条は翅端にある。外副肩条は後半がなく、内副肩条は破線状。中、後脛節は普通で扁平にならない。前胸背板の点刻はたいてい側方前半にある。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市。

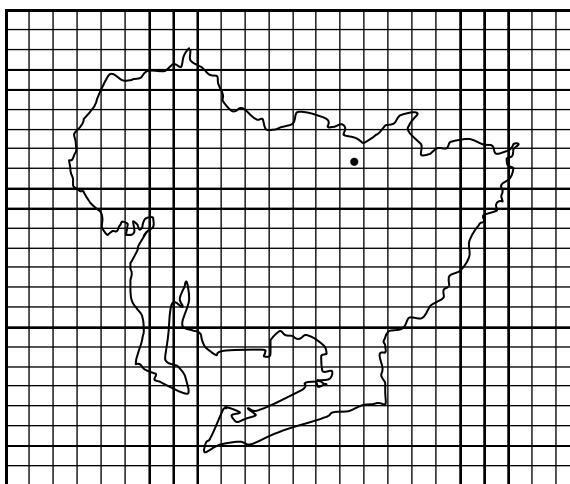
【国内の分布】

千島、北海道、本州、四国、九州、佐渡島、伊豆諸島、対馬、南西諸島。

【世界の分布】

樺太、沿海州、韓国、台湾、中国、フィリピン、インド。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

ウジ類を捕食する。やや新しい牛糞から見いだされる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

大型のエンマムシ類は、近年いずれも発見が困難になってきている。平野部における牧場の閉鎖など衛生環境の整備が、少なからぬ影響を与えたものと推測される。

【保全上の留意点】

ウジ類を捕食する大型のエンマムシ類の減少の背景には、野生小動物の減少や衛生環境の改善による影響が少なからずあるため、本種の保全は単純ではない。

【関連文献】

大原昌宏, 1996. 日本産エンマムシ上科解説Ⅳ. 甲虫ニュース, (116): 7-10.

トラハナムグリ *Trichius japonicus* Janson

【選定理由】

生態が良く解っていない。県内では豊根村（旧富山村）からの記録が 2 例あるに過ぎず、現状での増減は確認できない。

【形態】

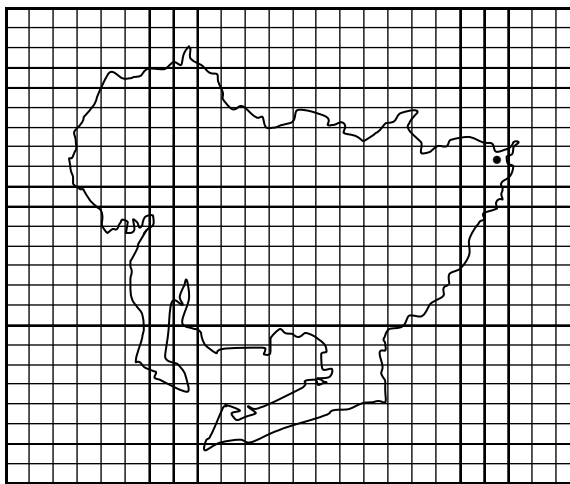
体長 12.7～16.0mm。腹面はツヤのある黒色で、黄白色ないし黄褐色の長毛を密生。頭循の前縁は縁取られ、中央でわずかに湾入する。前胸背板は両側が緩やかに弧を描き、後角はほとんど角張らない。上翅は黄褐色で側縁に通常 3 対の黒紋をそなえる。表面にツヤはなく、短毛をまばらにそなえる。

【分布の概要】

【県内の分布】
豊根村。

【国内の分布】
北海道、本州、佐渡島、四国、九州。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

成虫はシシウド、ノリウツギ、アザミ、ショウマなどの花に集まる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

他県では訪花している個体が見つかることの多い種類だが、概して記録は少なく、減少の原因は特定できない。

【保全上の留意点】

草地、雑木林などの自然環境の保全が必要である。

【関連文献】

酒井 香・藤岡昌介, 2007. 日本産コガネムシ上科図説 第 2 巻 食葉群 1: 147. 昆虫文献六本脚.
藤岡昌介, 2001. 日本産コガネムシ上科総目録: 127. コガネムシ研究会.
佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 357. 愛知県.

オオキノコムシ *Encaustes praenobilis* Lewis

【選定理由】

ブナ林などに生息し、サルノコシカケ類などの菌類に集まるが、個体数は少ない。

【形態】

体長 16～36mm。黒色で前胸背と上翅の四隅に濃赤色の斑紋がある。体は長く、両側はほぼ平行。

【分布の概要】

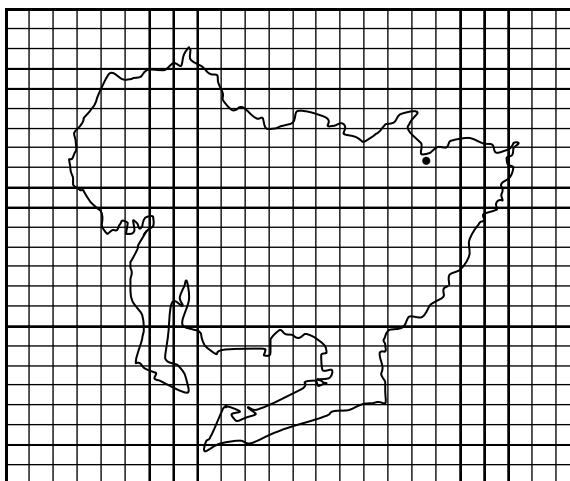
【県内の分布】

北設楽郡の山地（大野，2001）、豊田市（旧稲武町）（佐藤ほか，1990）。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布する。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

自然度の高い森林に生息する種で、県内では豊田市(旧稲武町)に生息地が見つかっている。近年個体数が減少してきている。

幼虫は白色腐朽菌の蔓延したブナなどの朽ち木を食べて成長する。成虫は主に夜間キノコ類に集まりこれを食べる。

【保全上の留意点】

キノコ類の豊富な自然度の高い森林に依存しているため、乾燥など生息地の環境変化に対して留意する必要がある。

【引用文献】

大野拓夫, 2001. 宮城インセクト 22. 宮城昆虫同好会, 仙台.
佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

ヒメアカハナカミキリ *Brachyleptura pyrrha* (Bates)

【選定理由】

1980年代まで山地に普通の種として知られていたが、全国的に近年の生息情報が顕著に乏しくなっていることが指摘されている。県内では標高的にもともと本種の分布可能域が限られ、従来さほど個体数が多いものではなかったが、近年の生息情報がもたらされなくなっている。

【形態】

体長 10～13mm、ずんぐりした体型で、脚が短い小型のハナカミキリ。黒色で、上翅は鮮やかな赤色。

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では設楽町(穂積, 1979)、豊田市(旧稲武町)(河路, 1984)、豊根村(旧富山村、旧豊根村)(竹内ほか, 1980)などの奥三河地域から記録されている。

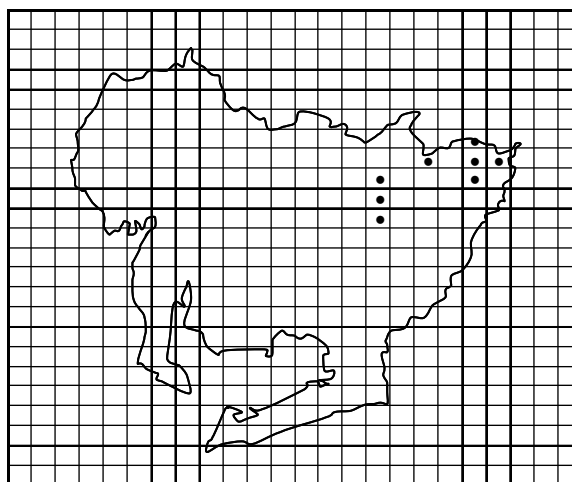
【国内の分布】

本州、四国に分布する。

【世界の分布】

日本の特産種である。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

ブナ帯～トウヒ帯にみられる。成虫は7月～8月に出現し、ノリウツギ等の花に集まる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

詳しい生息実態は不明であるが、この数年の生息に関する情報はもたらされていない。かつて普通種であったことから、急速に減少していることは事実であると考えられる。減少の具体的な理由は不明であるが、ブナ原生林の減少と林内の乾燥化の影響が考えられる。

【保全上の留意点】

生息域であるブナ林の面積をこれ以上減少させないことが必要である。

【引用文献】

- 穂積俊文, 1979. 東海甲虫誌, (19). 佳香蝶, 31 (117): 7-10.
河路掛吾, 1984. 1982年駒ヶ原高原で採集したカミキリムシ. 三河の昆虫, 31: 155-158.
竹内克豊・原田猪津夫・松野更一, 1980. 愛知県北設楽郡のカミキリムシ. 愛知県豊根村の動物: 231-285.

【関連文献】

- 佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

ベニバハナカミキリ *Paranaspia anaspoides* (Bates)

【選定理由】

ケヤキなどの大木にできた樹洞に生活史の大半を依存する種で、生存にはケヤキ類の大木の存在が不可欠である。県内では知多半島、豊田市足助町で記録があるが、稀な種である。本種の生活史が解明されたのはごく近年のことであり、今後詳しい分布ならびにその生息実態について詳しい調査が必要である。しかしながらケヤキなどの大木の少ない本県では、その生息基盤は脆弱であると安易に予想される。

【形態】

体長 9～14mm。黒色で、上翅は黒っぽい紅色。脚、触角は黒色、前胸背は横長で、後角が突出して肩を覆う。上翅は両側がほぼ平行。

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では南知多町（小島，1988）と豊田市の香嵐溪（佐藤ほか，1990）で発見されている。

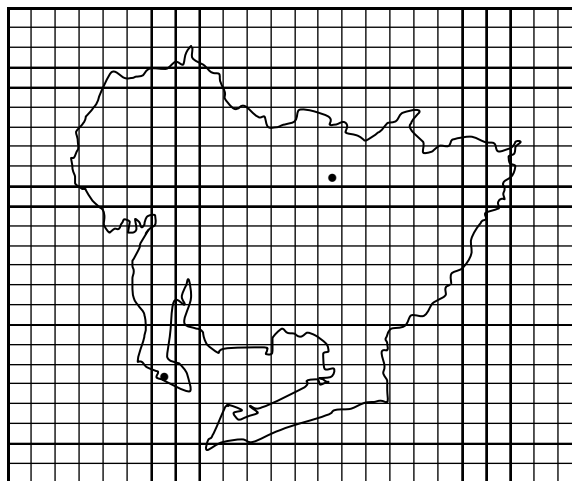
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

日本の特産種である。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

丘陵地から山地に生息する。成虫は、5～8月に見られるが、平野部での発生は5月から6月。ケヤキなどの大木にできた樹洞に住み、洞外にでることは少ない。交尾、産卵も樹洞内で行われると思われる。幼虫は樹洞内部の枯死部分を食べるとされる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

詳しい生息状況は不明であるが、元々当地方では個体数が少なかった可能性がある。関東地方など平野から丘陵地に大木の多い関東地方では、都市部でも生息していることから、里山周辺での大木の減少が要因として考えられる。

【保全上の留意点】

生息の基盤となるケヤキなどの大木の保全、およびその周辺環境の保存が必要である。最近では樹洞は樹木の延命治療としてことごとく埋められる傾向がある。これらは樹洞に依存する多くの昆虫類や小動物に対して生息地を破壊する行為であり、特に必要性が高くないものについては極力保全する努力が必要である。

【引用文献】

小島高志, 1988. 知多半島で採集した甲虫(第3報). 佳香蝶, 40 (154): 27-28.
佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

キオビクビボソハムシ *Lema delicatula* Baly

【選定理由】

県内での生息地では、確認される個体数は年々減少している。ツユクサの生育する河川の河原や、公園などで細々と生息しているが、生息基盤は人為的影響を受けやすく脆弱である。河川改修や緑地公園での除草剤散布や、整備事業に伴う工事などが及ぼす影響が危惧される。

【形態】

体長 4.3～4.5mm。頭部は赤褐色色の頭部を除き黒色。体色は一般に黄褐色。上翅は黒青色、幅広い赤色帯を中央部に装う。触角は暗褐色をしている。特徴のある斑紋により同定は容易である。



蒲郡市, 1989 年 9 月 9 日, 山崎隆弘 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村富山地区佐久間湖畔（山崎, 1995）、豊田市能見町（田中ほか, 2000; 2001）、豊田市猿投町・中金町・竹元町（蟹江, 2005）、蒲郡市五井町（山崎, 1990）、名古屋市・小牧市・犬山市・春日井市・豊田市（河路, 2008）。

【国内の分布】

本州、四国、九州、壱岐、対馬。

【世界の分布】

朝鮮半島・中国。

【生息地の環境 / 生態的特性】

越冬成虫を 4 月下旬から 5 月上旬にかけてツユクサ上で見ることができる。5 月中旬から 6 月中旬にかけてツユクサの葉浮腫部に産卵し、新成虫は 8～9 月にかけて出現する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

里山的環境下に依存する草地性の昆虫で、産卵期が農繁期と重なるため、草刈や除草剤による影響を受けやすいことが減少の要因として考えられる。

【保全上の留意点】

畑地、土手、堤防の側面、河川敷などでの農薬、除草剤の使用に際しては、十分な配慮が必要である。

【特記事項】

新成虫が現れる 8 月～9 月の調査の必要性を残す。

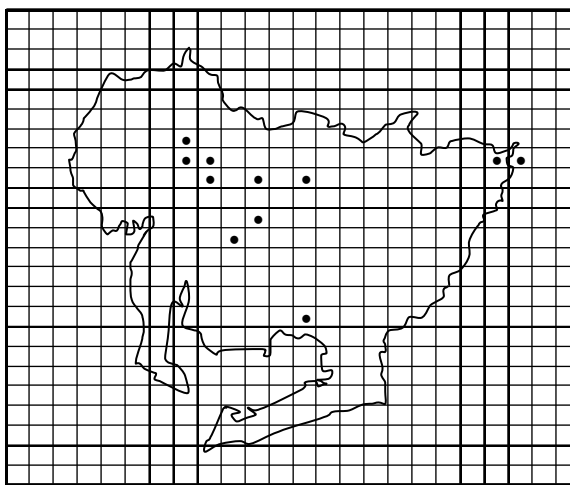
【引用文献】

- 河路掛吾, 2008. キオビクビボソハムシの分布記録. 佳香蝶, 60 (235): 244.
蟹江 昇, 2005. 豊田市の昆虫類・甲虫目. 豊田市自然環境調査報告書(資料編): 161-236. 豊田市.
山崎隆弘, 1990. 愛知県蒲郡市でキオビクビボソハムシを採集. 佳香蝶, 42 (161): 11.
田中 蕃ほか, 2000. 矢作川河岸・野見公園～鶴の首橋間の昆虫. 矢作川研究, (4): 19-59.
田中 蕃ほか, 2001. 1955-1999 年の調査における豊田市ブロックの矢作川河辺の昆虫. 矢作川研究, (5): 223-235.
山崎隆弘, 1995. 愛知県富山村のハムシ. 三河の昆虫, (42): 393-396.

【関連文献】

- 山崎隆弘・穂積俊文, 1990. 愛知県のハムシ科. 愛知県の昆虫, (上): 434-460. 愛知県.

県内分布図



ヒメカバノキハムシ *Syneta brevitibialis* Kimoto

【選定理由】

県内から確認されているのは奥三河山地において 1 ヶ所のみで、生息基盤が脆弱である。生態についてもほとんど解明されていない。

【形態】

体長：3.8～4.5mm。体色は黄褐色または暗褐色のものがある。♂の後肢脛節末端部が顕著に肥大しており、特徴のある形態をしているので近似種との区別は容易である。



豊田市, 1988 年 5 月 5 日, 山崎隆弘 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市（旧稲武町）面ノ木峠（山崎・穂積, 1990）からのみ確認されている。

【国内の分布】

紀伊半島など本州のみに産する。

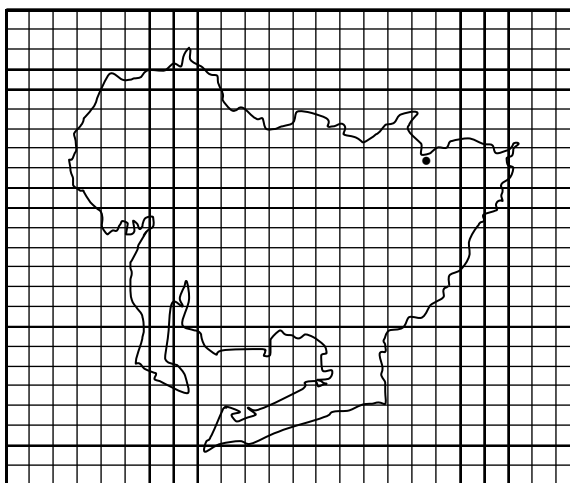
【生息地の環境 / 生態的特性】

県内では新緑の頃、標高約 1,000m 付近のブナ帯生息する種と思われるが、小形種のため現地での確認作業は難易である。生態面でも詳しいことは分かっていない。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内では産地以外からの採集例がない。生息地であるブナ林の減少、環境悪化が減少の要因として考えられる。

県内分布図



【保全上の留意点】

ブナ、トチノキ、ナラ、カンバ、シデなどのブナ帯の自然林の保全が重要と思われる。今後、同様な環境下で新たな生息地が見つければ保全の方向性が見出せる。

【特記事項】

愛知県での記録地と隣接する長野県下伊那郡の蛇峠山から 2008 年 6 月に採集による確認をしている。したがって、長野県から愛知県にかけての一带では断続的であるが、広く分布をしているものと思われる。

【引用文献】

山崎隆弘・穂積俊文, 1990. 愛知県のハムシ科. 愛知県の昆虫, (上): 434-460. 愛知県.

【関連文献】

木元新作・滝沢春雄, 1994. 日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説. 東海大学出版会.

カギアシゾウムシ *Bagous bipunctatus* (Kono)

フタホシカギアシゾウムシ *Bagous kagiashi* Chujo et Morimoto

バッキンガムカギアシゾウムシ *Bagous buckingami* O'brien et Morimoto

コカギアシゾウムシ *Bagous fractus* O'brien et Morimoto

ヤヤコブカギアシゾウムシ *Bagous spicatus* O'brien et Morimoto

【選定理由】

カギアシゾウムシ類はいずれも全国的に少ない種で散発的にしか採集されないため、その生態については水辺の環境にいることぐらいしか分かっていない。水辺の環境の悪化は急速に進行しており、生態も分からないうちに姿を消してしまうことも懸念される。愛知県ではカギアシゾウムシ以外はすべて 1 個体しか得られておらず、産地の変貌ぶりからしてすでに絶滅している可能性も否定できない。

【形態】

著しい特徴は後脛節が湾曲しカギ状になっていることである。体長はやや大きめのカギアシゾウムシを除くと他は 3mm 内外である。極めてよく似ており、分類は比較標本がないとほとんど不可能といえる。

【分布の概要】

【県内の分布】

カギアシゾウムシ : 常滑市、名古屋市、岡崎市、弥富市（旧弥富町）、豊田市
コカギアシゾウムシ : 豊田市
他の 3 種 : 常滑市

【国内の分布】

カギアシゾウムシ : 北海道、本州、四国、九州
フタホシカギアシゾウムシ : 本州、四国、九州、琉球
バッキンガムカギアシゾウムシ : 本州、九州
コカギアシゾウムシ : 北海道、本州
ヤヤコブカギアシゾウムシ : 本州、四国

【生息地の環境 / 生態的特性】

カギアシゾウムシは灯火採集、スウィーピングにより田畑の周囲で散発的に捕れているが、他種は採集状況が分からない。他県ではため池のガガブタをすくってバッキンガムカギアシゾウムシをまとめた個体数得ていることから、カギアシゾウムシ類のホストとしてため池に生える水草類、岸辺の植物などが推定される。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

採集例が少なすぎて減少しているかどうかは全く分からない。水辺の環境がどんどん悪化している現状では絶滅の危険性はかなり高いと思われる。

【保全上の留意点】

現状では採集は全くの偶然に頼っている。これでは確実に発生を繰り返しているか、個体数がどれだけかという最も基礎的な情報が得られない。まずは生態を解明することが肝要である。生態が分かれば生息地を見つける手がかりとなり、発生状況を継続的に調べることも可能になるであろう。

【関連文献】

C. O'Brien, I. Askevold & K. Morimoto, 1994. ESAKIA, (34): 1-74.
村上哲夫, 1986. 猪高緑地内の池の魚類と底棲生物. ため池の自然, (4): 7-8.

チビコバンゾウムシ *Miarus vestitus* Roelofs

【選定理由】

コバンゾウムシ類は特定の花に集まり、その実に産卵すると思われる。本種は平地から山地まで普通に見られるツリガネニンジン（オトギリソウ）を宿主にしている。愛知県ではツリガネニンジン（オトギリソウ）は各所で散見されるが、現在まで県内の生息地は1カ所しか確認されておらず、生息基盤は脆弱である。

【形態】

体長 2.2～3.5mm、全体黒色で黄褐色の微毛で一面覆われている。

【分布の概要】

【県内の分布】

設楽町井戸沢。

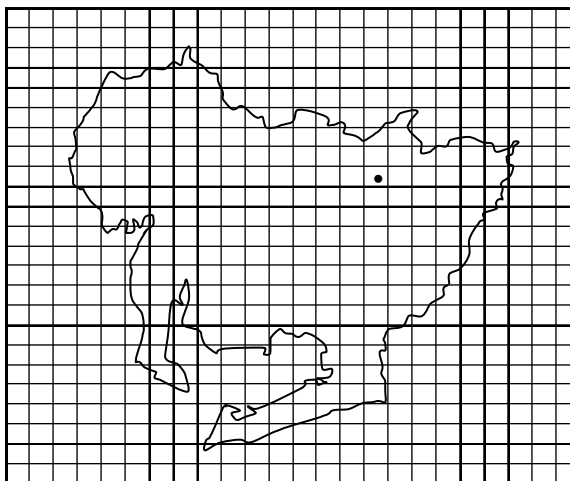
【国内の分布】

本州に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

初秋ツリガネニンジン（オトギリソウ）が咲き始める頃に現れ、花の中に潜る。つぼみもしくは咲き始めた花の子房に外から孔をあけ卵を産み込む。幼虫は種子を食べて成長し、子房の内部で蛹化羽化する。10月頃までに成虫は子房から脱出し越冬する。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

現時点で確認された生息地は設楽町井戸沢のみで、林道脇に十数株生えるツリガネニンジン（オトギリソウ）で少数個体が細々と発生を続けている。付近に数本程度ツリガネニンジン（オトギリソウ）が生えている場所が散在するが、いずれの場所でも本種を確認できていない。

岐阜県関市での観察例では、8月下旬に一齐に行われた、草刈りにより著しい影響を受け、その後2年たっても回復していない。この例から、田畑周辺の草刈りなど営農や里山管理等の変化が本種の減少の大きな要因となっている可能性が高い。

【保全上の留意点】

井戸沢の生息地で林道の管理、改修工事などを行う際は、本種の保全に配慮した施工が必要である。また、生物多様性保全に配慮した里山や草地の管理が求められる。

ホソツヤアリバチ *Methocha yasumatsui* Iwata

【選定理由】

宿主であるハンミョウ類が減少したことに伴って非常に少なくなった。

【形態】

体長 10mm内外、雄は有翅、雌は無翅。体は黒色で胸部と肢は赤褐色、強い光沢がある。

【分布の概要】

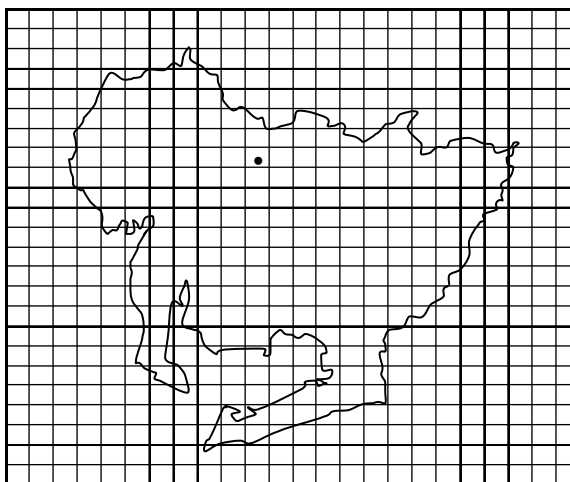
【県内の分布】

豊田市猿投山で記録されている。

【国内の分布】

本州。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

河川敷のあるような開放植生で砂地が露出したような環境で、そこで生活しているコハンミョウ、ヒメハンミョウなどに寄生して生活する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

開放植生的環境が改修などによって減少し、そこに生活の主体があるハンミョウ類が少なくなった。ただ詳細な生息実態は今後の綿密な調査を必要とする。

【保全上の留意点】

河川敷、山林の開放植生的環境の復元が大切。植林だけが環境保全でないことにも注意が必要。

トワダオオカ *Toxorhynchites towadensis* (Matsumura)

【選定理由】

大きな木の樹洞に溜まった水が生活環境である。近年森林伐採が進み、この種が生活できるような大木が非常に少なくなった。

【形態】

体長 10mm 内外。体は青藍色の美しい大型のカのなかま。口吻は大きく下方に曲っている。

【分布の概要】

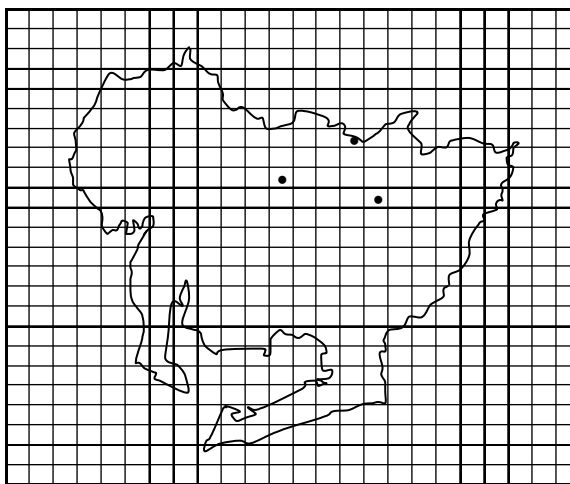
【県内の分布】

北設地方の良好な森林がこれまでの生息域である。

【国内の分布】

本州、四国、九州、対馬、屋久島。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

大木が生育できる森林で、かつ樹洞ができやすい木の存在が必要不可欠な条件である。樹洞内に溜まった水の中で他の小動物を捕食して生活している。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

森林伐採が進み、大木が残されている所が少なくなった。二次林より原生林がより良好な生息域であったが、後者の林が極限されるようになって本種の姿を見ることが非常に少なくなった。

【保全上の留意点】

現在ある原生林の保全と二次林の育成。

【特記事項】

カといっても動物の血液を吸う仲間ではなく、葉上に静止して露を吸収したりしている。

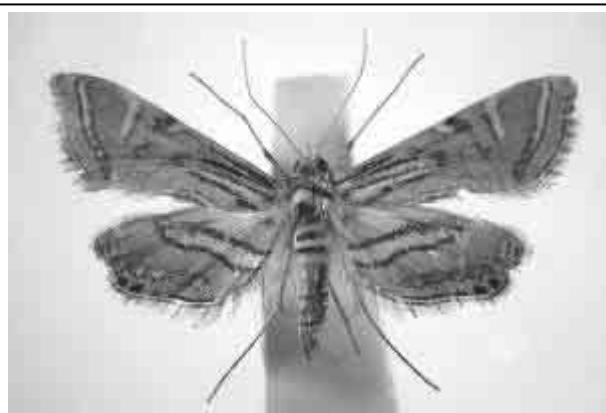
エンスイミズメイガ *Eristena argentata* Yoshiyasu

【選定理由】

幼虫は汽水域で生活する水生昆虫であるが、その環境悪化に伴い生活圏が狭められている。

【形態】

開張 13～16mm、オレンジ色の地に、銀色及び黒色の縁取りを持った白色の縦線が前後翅の基部付近から翅頂に向かって走り、前翅には同様な横線が見られる。腹部にも黒い横線が縞状に見られる。触角は糸状。6本の脚はいずれも長く発達する。



弥富市鍋田, 1987年6月16日, 間野隆裕 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

弥富市鍋田川河口 (間野, 1989・1990)

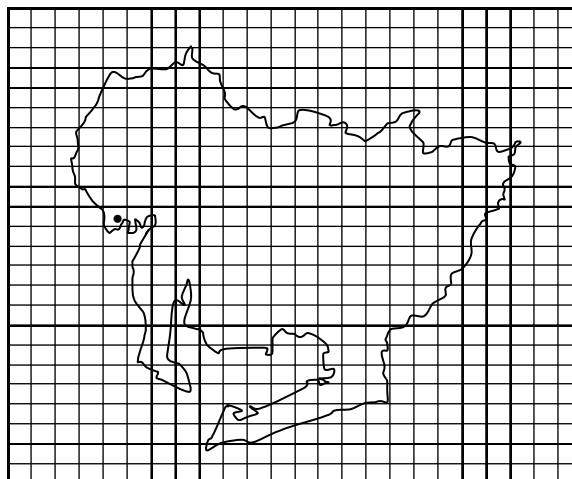
【国内の分布】

県外では三重県の紀北町汐見船津川、宮川河口、鈴鹿川河口 (矢崎・間野, 2003)、愛媛県、徳島県吉野川、奄美大島、九州熊本県 (大塚, 1996)、対馬で記録されている。

【世界の分布】

現状では日本特産種。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

Yoshiyasu (1988) によって新種記載された種。和名は「塩水」の意で、その名の通り幼虫は汽水域の水中で、食草である蘚類をつづって巣を作り、その中で生活するという特異な生態を有する。成虫は5月から10月まで発生する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

隣県の生息状況から、県内でもかつては河川の汽水域付近に広く分布していた可能性があるが、現在までのところ木曽川の汽水域でしか見つかっていない。種の盛衰は水質や食草繁茂状況などいくつかの要因によって規定されると考えられる。

【保全上の留意点】

河川及び沿岸域の水質を中心とした環境保全が最善の策と考えられる。

【引用文献】

- 間野隆裕, 1989. 木曽川河口の湿地の蛾. 蛾類通信, (143): 283-287.
間野隆裕, 1990. 愛知県海部郡弥富町の蛾. 佳香蝶, 41 (160): 46-56.
大塚 勲, 1996. 九州未記録の蛾類 10. 蛾類通信, 189: 233.
矢崎充彦・間野隆裕, 2003. 三重県におけるエンスイミズメイガの記録. 佳香蝶, 55 (216): 86.
Yoshiyasu, H., 1988. A New Estuarine and an Unrecorded Species of the Nymphulinae (Lepidoptera, Pyralidae). Kontyu 56 (1): 35-44.

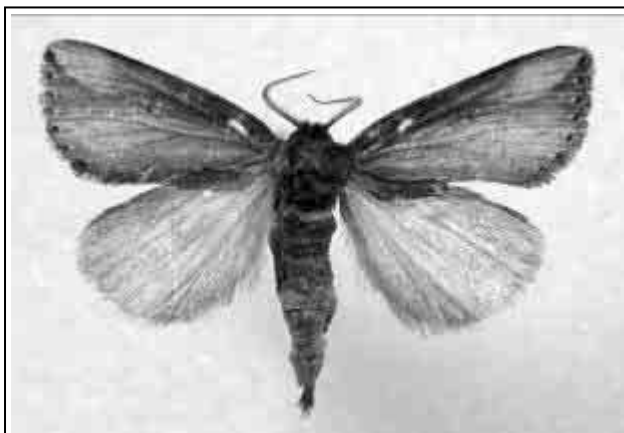
カバイロシャチホコ *Ramesa tosta* Walker

【選定理由】

全国的に記録が少なく、県内では新城市における記録（井上，1959）が唯一で、以後全く記録がない。

【形態】

開帳約 32mm、♂の触角は櫛歯状で、♀は糸状。前翅は基部から 2/3 の前縁部分と後縁部が濃茶色で、中央部分から先端部にかけて薄茶色。後翅は白色でわずかに茶色の鱗粉を散布する。



新城市桜淵公園, 1957 年 6 月 16 日, 菅 貞義 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では新城市における記録（井上，1959）が唯一。

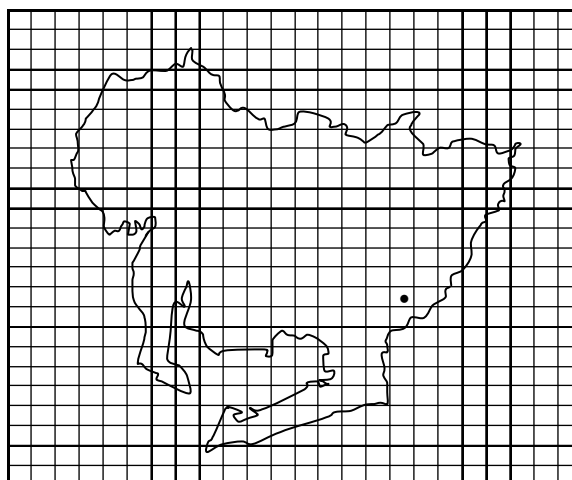
【国内の分布】

千葉県、静岡県、佐賀県などのわずかな地点から記録されているが、いずれも 1970 年代以前の記録である。現在は九州の限られた草原が確実な産地として知られるのみである。

【生息地の環境 / 生態的特性】

幼虫はイネ科植物を摂食することが知られており、草地性であることが示唆される（杉，1987）。

県内分布図



【引用文献】

井上 寛, 1959. 菅貞義氏採集の新城市桜淵公園の蛾類. 蛾類同志会通信, (16/17): 158-159.
杉 繁郎(編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑: 167, pl.78. 講談社, 東京.

【関連文献】

井上 寛ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社. 東京.

マダラウスズミケンモン *Hylonycta subornata* (Leech)

【選定理由】

全国的に記録が少なく、県内では豊田市小原地区での記録があるのみである（杉, 1970）。

【形態】

前翅は黒の地色。中室基部や環状紋の外側、および外横線に沿って点々と白斑が散布される。後翅は外縁部が帯状に黒くその内側は薄茶色。

【分布の概要】

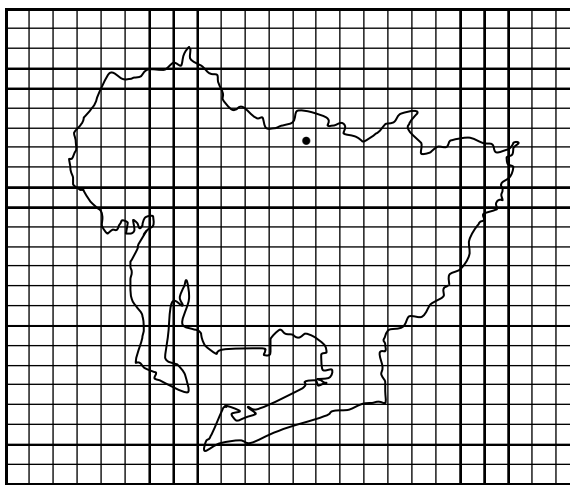
【県内の分布】

県内では豊田市小原地区における記録（杉, 1970）が唯一。

【国内の分布】

日本特産種で、本州の関東地方から近畿地方、大分県などの丘陵地に産するが、産地はかなり局地的である。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

本種はクヌギなどのブナ科植物を食し里山的二次林に生息するガである。10月の幼虫は蛹で越冬し、春羽化する。9月頃得られた記録もある。

【引用文献】

杉 繁郎, 1970. ウスズミケンモンとその近縁種マダラウスズミケンモン(新称)について. 蛾類通信, (61): 11-14.

【関連文献】

井上 寛ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社. 東京.
杉 繁郎(編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑: 189. 講談社, 東京.

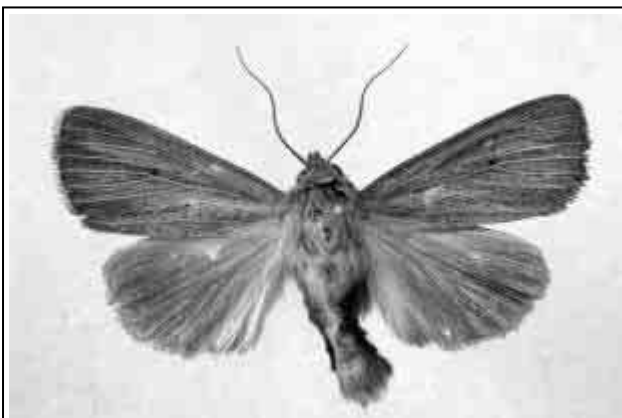
ウスベニキヨトウ *Aletia pudorina subrosea* (Matsumura)

【選定理由】

低湿地のガで、開発などにより生息地が著しく減少している。

【形態】

開張 33～42mm、前後翅とも全体が薄紅色だが、濃淡の個体変異が激しい、中室端付近に黒点を生じ、目立たない微細な黒点を全体に散布する。後翅が灰色の個体も見られる。



弥富市鍋田, 1989年9月7日, 間野隆裕 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県弥富市（間野, 1990a）、瀬戸市・犬山市・日進市（田中ほか, 1991）及び豊田市（間野, 1990b）で得られている。

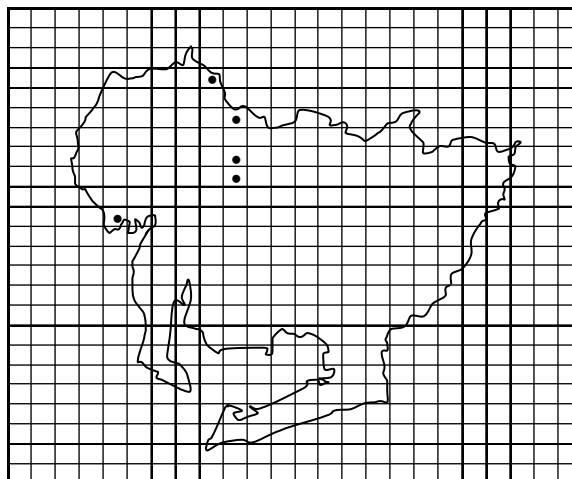
【国内の分布】

北海道及び本州に分布。内陸性種とされていたが、東海地方では愛知県のほか三重県四日市市（間野・蒔田, 1989）および員弁市（間野, 1989）で得られている。

【世界の分布】

ユーラシア種。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

幼虫の食草としてハマニンニク、ヤマアワ、ヨシ、ススキの記録があるが（小木, 1987）、東海地方の産地はいずれもヨシが繁茂しているところである。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

産地では個体数も比較的多いが、局地的で追加産地はこれまでのところ発見されていない。

【保全上の留意点】

低湿地やヨシ原の減少を食い止めると共にその動向に注意を払う。

【引用文献】

- 小木広行, 1987. ハマニンニクを食草とするヤガ科の幼虫. 蛾類通信, (140): 236-239.
間野隆裕, 1989. 三重県北部の注目すべき蛾. 蛾類通信, (152): 24-26.
間野隆裕・蒔田実造, 1989. 四日市市で得た蛾. ひらくら, 33 (5): 67-76.
間野隆裕, 1990a. 愛知県海部郡弥富町の蛾. 佳香蝶, 41 (160): 45-60.
間野隆裕, 1990b. 豊田市八草町の湿地で得た蛾. 佳香蝶, 42 (163): 48.
田中 蕃ほか, 1991. 愛知県の蛾類. 愛知県の昆虫, (下): 96-416. 愛知県.

【関連文献】

- 井上 寛ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社. 東京.

キスジウスキヨトウ *Archanara sparganii* (Esper)

【選定理由】

湿地性のガで、生息地の減少が著しい。

【形態】

開張 42mm、前翅は淡い灰褐色で黄色味を帯びる。腎状紋の下端は上方に開く黒色の半環で表される。産卵管は強壮、先端部は強く腹部に屈し、第8節からは尾方に向かう1対の突起を生じる。



弥富市鍋田, 1990年7月15日, 間野隆裕 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市、瀬戸市、田原市、日進市、弥富市(以上田中ほか, 1991)。

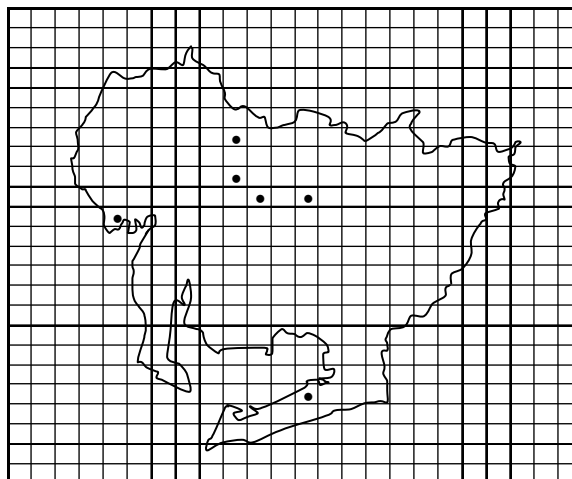
【国内の分布】

日本では北海道、本州、四国、九州北部に記録がある。

【世界の分布】

ユーラシア種。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

低層湿地から内陸盆地まで垂直分布は比較的広い。年1化 7～9月に出現し、幼虫はガマ属やミクリ属、ヨシ、アブラガヤ等水生植物の茎中に棲みその中で越冬するという。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

平地から丘陵地の湿地で記録されているが、いずれも1980年代以前の記録で、1990年弥富市の記録が最も新しいものとなっている。かつての生息地の多くは、土地改変などによって生息できない状況となっている。

【保全上の留意点】

生息できる水生植物の繁茂する湿地の保全が急務である。

【引用文献】

田中 蕃ほか, 1991. 愛知県の蛾類. 愛知県の昆虫, (下): 96-416. 愛知県.

【関連文献】

井上 寛ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社. 東京.

シラユキコヤガ *Eulocastra sasakii* Sugi

【選定理由】

特定の環境で確認されており、その生息環境が激減している。

【形態】

開張 13～15mm、頭部および胸背部は黒褐色、前翅は白地に外縁部と外横部に幅広の黒条線がある。後翅は無紋、腹部と共にやや黄色を帯びる。



豊田市下川口, 2008年7月10日, 間野隆裕 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

これまで豊田市田茂平（杉, 1990；田中ほか, 1991）と、豊橋市葦毛湿地（中村ほか, 1996）から記録されていたが、今回豊田市下川口でも記録された（間野・宮野, 2008）。

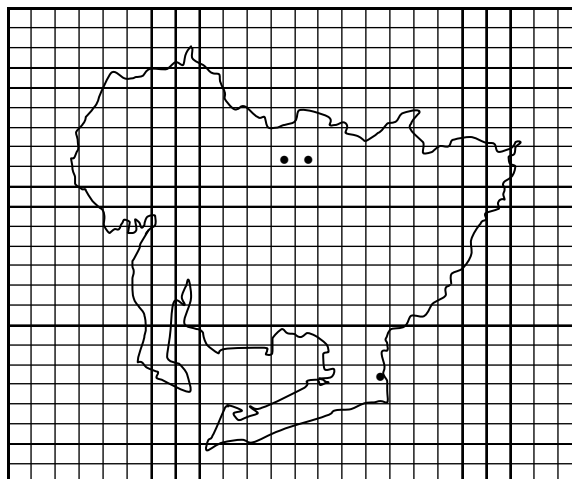
【国内の分布】

全国的にまれで、愛知県のほか秋田県（井上ほか, 1982）、岐阜県（船越・今井, 1991）、三重県（間野, 2004）などわずかな記録しか見られない。

【世界の分布】

現状では日本特産種。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

湿地のみから得られており、幼虫の食草としてヌマガヤが報告されている（中村ほか, 1996）。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

生息環境としてはエゾスジトウと同様、貧栄養湿地で、その湿地環境の減少が、本種の減少要因として大きいと考えられる。

【保全上の留意点】

生息環境である湿地環境の保全。

【引用文献】

- 船越進太郎・今井滋行, 1991. スゲドクガ、シラユキコヤガ岐阜県における記録. 誘蛾燈, 125: 99-100.
井上 寛ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社.
間野隆裕, 2004. 第5章 昆虫 第10節 チョウ目(ガ類). 上野市史 自然編: 723-747, 995-1030. 上野市.
間野隆裕・宮野昭彦, 2008. カバフキシタバ・シラユキコヤガ・エゾスジトウの愛知県豊田市の記録. 誘蛾燈, (194): 105-107.
中村正直・工藤広悦・内藤幸之助, 1996. 葦毛湿地(豊橋市岩崎町)で獲られた蛾類目録(葦毛第2湿地(指定外地)の蛾類調査報告 4). 蛾類通信, 189: 223-230.
杉 繁郎, 1990. シラユキコヤガの第二の産地と生息環境の知見. 蛾類通信, 157: 99-100.
田中 蕃ほか, 1991. 愛知県の蛾類. 愛知県の昆虫(下), pp.96-416. 愛知県.

